

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

爵 山 城 跡
大 杓 鐘 鑄 谷 遺 跡
里 仁 遺 跡

1993

鳥取市教育委員会

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

爵 山 城 跡
大 杙 鐘 鑄 谷 遺 跡
里 仁 遺 跡

1993

鳥取市教育委員会

本文目次

序文

例言・凡例

I	はじめに	1
1.	発掘調査の契機と目的	1
2.	発掘調査の経過	1
II	爵山城跡	3
1.	遺跡の位置と環境	3
2.	発掘調査の概要	4
III	大杙鐘鑄谷遺跡	6
1.	遺跡の位置と環境	6
2.	発掘調査の概要	10
IV	里仁遺跡	14
1.	遺跡の位置と環境	14
2.	発掘調査の概要	18
V	まとめ	23

挿図目次

第1図	調査地位置図	2	第9図	大杙鐘鑄谷遺跡AトレンチSK-01平面図・断面図	11
第2図	爵山城跡トレンチ配置図	4	第10図	大杙鐘鑄谷遺跡AトレンチSK-01出土遺物実測図	12
第3図	爵山城跡T3出土遺物実測図	4	第11図	大杙鐘鑄谷遺跡AトレンチSK-01出土遺物実測図	13
第4図	爵山城跡T1～T3平面図・断面図	5	第12図	里仁遺跡トレンチ配置図	17
第5図	大杙鐘鑄谷遺跡トレンチ配置図	7	第13図	里仁遺跡1・2・3・4・5・6・7・8トレンチ断面図	19
第6図	大杙鐘鑄谷遺跡Bトレンチ断面実測図	8	第14図	里仁遺跡9トレンチ平面図・断面実測図・出土遺物、10・11トレンチ断面図	20
第7図	大杙鐘鑄谷遺跡Aトレンチ平面図・断面図	9	第15図	里仁遺跡1・4・6・8トレンチ出土遺物実測図	21
第8図	大杙鐘鑄谷遺跡SK-02平面図・断面図・出土遺物	10			

挿表目次

第1表	里仁遺跡トレンチ一覧表	22
-----	-------------	----

図版目次

図版1	爵山城跡	図版10	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版2	大杙鐘鑄谷遺跡	図版11	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版3	大杙鐘鑄谷遺跡	図版12	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版4	大杙鐘鑄谷遺跡	図版13	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版5	里仁遺跡	図版14	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版6	里仁遺跡	図版15	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版7	里仁遺跡	図版16	大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物
図版8	里仁遺跡	図版17	里仁遺跡出土遺物
図版9	爵山城跡、大杙鐘鑄谷遺跡出土遺物	図版18	里仁遺跡出土遺物

序 文

この発掘調査報告書は、平成4年度に国・県の補助金を受けて実施した「鳥取市内遺跡」の発掘調査記録です。

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡があり、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えています。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の方々の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度に調査を実施いたしました爵山城跡、大杙鐘鑄谷遺跡、里仁遺跡の発掘調査事業も地権者の方々を初めとする関係各位のご協力によって無事所期の目的をはたし、大きな成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成5年3月

鳥取市教育委員会
教育長 田中哲夫

例 言

1. 本書は、平成4年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は、爵山城跡、大杙鐘鑄谷遺跡、里仁遺跡である。
3. 調査の期間は、平成4年8月3日から平成5年3月19日である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 本報告書に用いた方位は、第1図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
6. 発掘調査の実施および本書の作成にあたっては多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。記して感謝いたします。

鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、(財)鳥取市教育福祉振興会埋蔵文化財調査センター、中国電力株式会社、有限会社東信商事、学校法人イナバ自動車学校、面影郷土史研究会、山根幸恵、西村繁昌(順不同、敬称略)

7. 発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体	鳥取市教育委員会
事務局	鳥取市教育委員会社会教育課文化係
調査担当者	平川誠(社会教育課文化係)
	藤本隆之(鳥取市埋蔵文化財調査センター)

I はじめに

1. 発掘調査の契機と目的

鳥取市は、鳥取県の東部に位置し面積239万㎡、人口14万余を擁する山陰の中核都市である。県庁所在地として政治・経済・文化活動等の中心的な役割を担っている。市域の中心は、千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、平野の周辺部は丘陵地となっている。近年まで平野部は主として水田として利用され、丘陵地では二十世紀梨を中心とする果樹栽培が行われてきた。しかし、近年は企業進出による工場用地や住宅団地の造成等によって土地利用の変化が著しい。

肥沃な鳥取平野は、原始・古代から重要な生産基盤として人々の生活を支え、政治・経済・文化・交通の要地としての位置を占めてきた。このような地理的条件を背景として、鳥取市内には数多くの埋蔵文化財が残されている。これまでの分布調査によって2千箇所をこえる古墳、遺物散布地が確認されている。このため各種開発事業との調整が必要となる遺跡も近年増加の一途をたどっている。

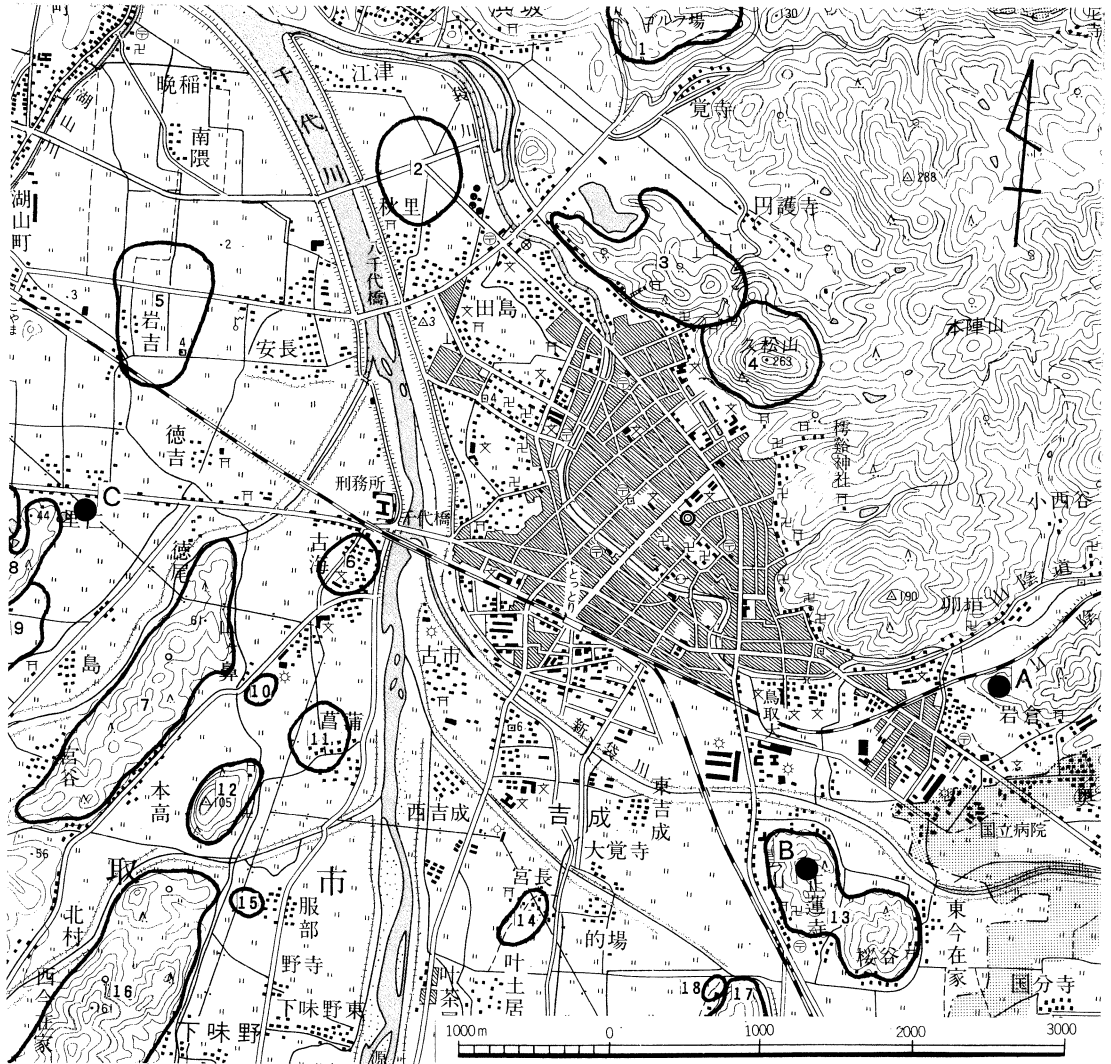
今回報告する爵山城跡、大杙鐘鑄谷跡、里仁遺跡もそれぞれ送電塔建設、住宅地造成、自動車学校建設等の開発事業が計画され事前に協議を受けたものである。それぞれの遺跡とも、開発事業との円滑な調整に必要な具体的な資料が少ないため、各遺跡の範囲、遺構の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の詳細な資料を得ることを目的として発掘調査を実施した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は、まず爵山城跡から着手し、その後大杙鐘鑄谷遺跡、里仁遺跡と順次実施した。爵山城跡は、平成4年8月17日から8月24日まで、大杙鐘鑄谷遺跡は、平成4年9月4日から10月2日まで、里仁遺跡は、平成4年11月11日から12月21日まで現地作業を実施した。出土遺物などの整理、報告書作成作業は、現地調査終了後に実施した。

発掘調査面積は、爵山城跡28㎡、大杙鐘鑄谷遺跡120㎡、里仁遺跡287㎡で合計435㎡となった。

発掘調査は、前述のとおり開発計画の調整資料を得るための試掘調査という基本的な性格のため、各遺跡ともトレンチ（試掘坑）の掘り下げによる遺構及び遺物包含層の確認に主眼をおいて行なった。調査した試掘坑については、平面図、断面図を作成して写真撮影を行なった。



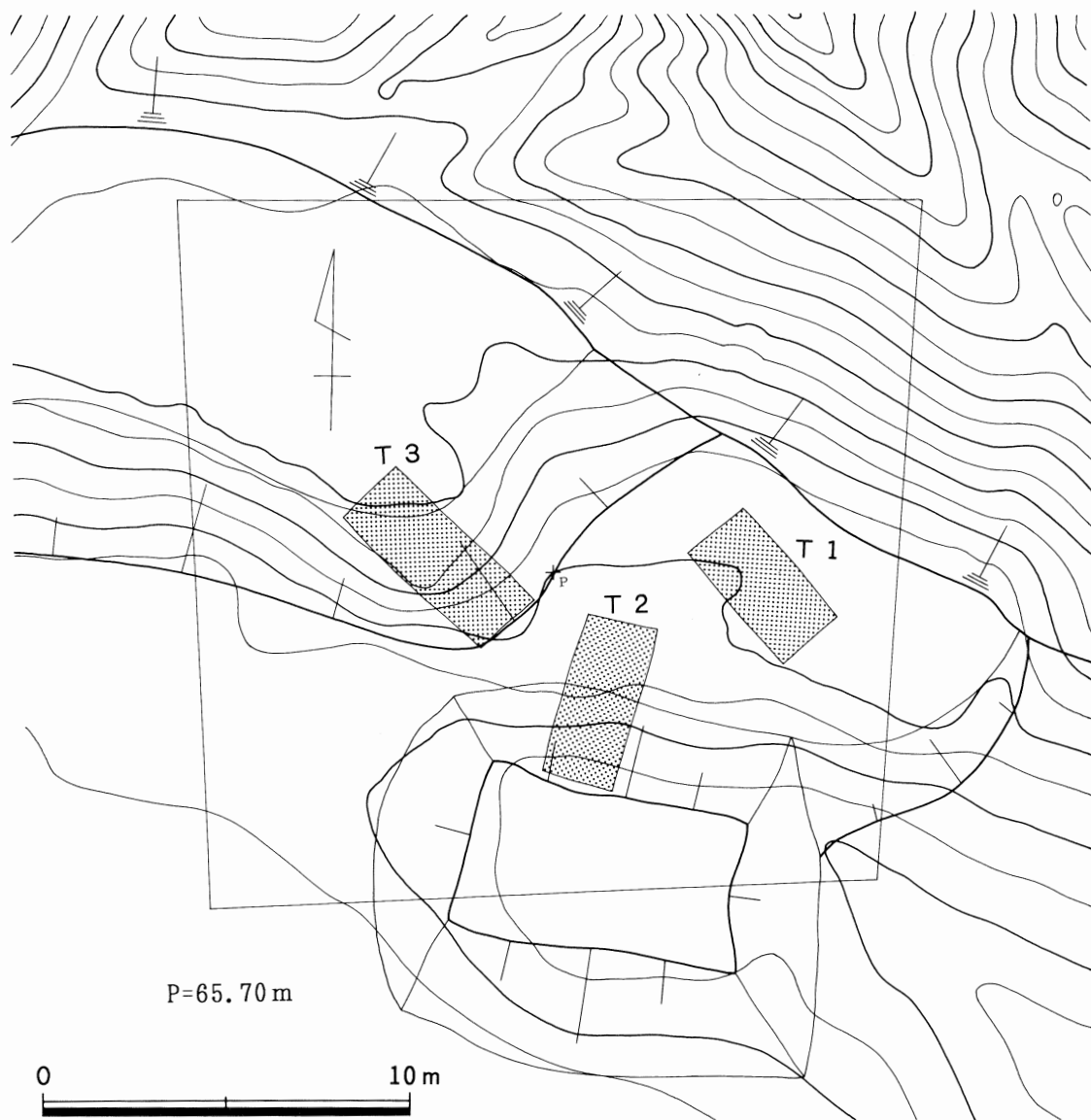
- A. 爵山城遺跡
- B. 大杣鐘鑄谷遺跡
- C. 里仁遺跡
- 1. 開地谷古墳群
- 2. 秋里遺跡
- 3. 雁金山古墳群
- 4. 鳥取城跡
- 5. 岩吉遺跡
- 6. 古海遺跡
- 7. 山ヶ鼻古墳群
- 8. 里仁古墳群
- 9. 大桝遺跡
- 10. 山ヶ鼻遺跡
- 11. 菖蒲遺跡
- 12. 釣山古墳群
- 13. 面影山古墳群
- 14. 宮長竹ヶ鼻遺跡
- 15. 服部遺跡
- 16. 下味野古墳群
- 17. 大路山古墳群
- 18. 西大路土居遺跡

第1図 調査位置図

Ⅱ 爵山城跡

1. 遺跡の位置と環境

爵山城跡は鳥取市街地の東に位置し、鳥取市卯垣地区と岩倉地区に挟まれた標高140mほどの尺山（爵山）と呼ばれる丘陵先端部に立地する。この丘陵は岩美郡国府町とにまたがる宇倍山山塊から延びる丘陵で、鳥取平野を囲む丘陵の一つである。先端部は千代川支流袋川に注ぐ百谷川の下流部に突き出し、滝山谷入口の隘路を形成している。滝山谷は、古代から但馬方面への交通の要衝となっており、現在でもJR山陰本線が通っている。



第2図 爵山城跡トレンチ配置図

爵山城跡の位置する卯垣地区は、かつては鳥取市近郊の農村であったが、J R鳥取駅の東約2 kmに位置することから近年特に宅地化が進行し、現在は新興住宅地となっている。

この爵山城跡周辺の丘陵地は、鳥取市でも有数の古墳密集地となっており、宇倍山の古墳群などが古くから知られている。古墳の多くは後期の群集墳で、横穴式石室を埋葬施設とするものが多いようである。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡としては、立川遺跡が知られており、以前の小発掘では古墳時代前期～中期の土器、木製品が多量に出土している。また、採集品であるが、弥生時代中期の土器も出土しており、当地域の集落遺跡の初源を知ることができる。

律令体制下になるとこの地域は因幡国法美郡に組み込まれ、郡内には因幡国府が置かれる。この時期及び中世のはっきりした遺跡は知られていないが、滝山地区からは経塚が発見されている。滝山の経塚は明治年間に偶然発見されたもので、銅製の経筒に法華経などの紙本経10巻が納められていた。経巻の奥書に鎌倉時代の正治元年（1199）の年号が記されている貴重なものである。戦国時代にはいと、今回調査した爵山城が築かれるなど当地も戦乱の時代となる。羽柴秀吉の鳥取城攻めでは、爵山城の滝山谷を挟んだ大閤ヶ平に本陣が置かれ、滝山谷は秀吉軍の進入路となった。

2. 発掘調査の概要

今回の試掘調査は、送電塔1基の建設予定地を対象に実施した。発掘調査地の地番は、鳥取市卯垣字尺山286-1番地である。

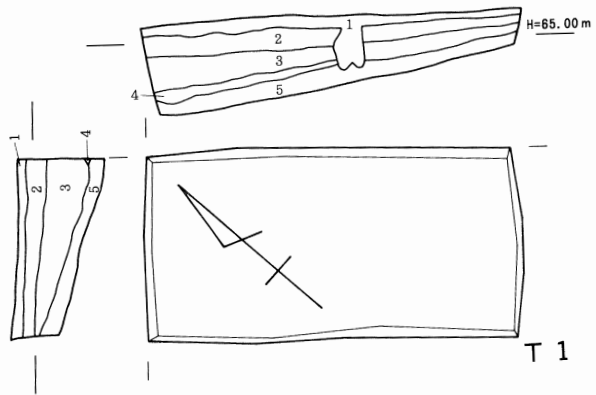
発掘調査は前述の通り、遺構及び遺物包含層の確認に主眼をおきトレンチ掘り下げによって行った。現地は、爵山山頂から500mほど西側に下った丘陵先端部で、滝山谷は無論のこと鳥取平野を一望することができる。先端部の標高は70m前後で、段状及び低い土塁状の地形が認められる。送電塔はこの山城に伴うと考えられる地形を避け、丘陵頂部から北側にやや下った位置に計画したが、なお小規模な二段の段状地形が認められた。このためトレンチはこの送電塔建設予定地の平坦面に1カ所、段状平坦面の傾斜変換点に2カ所設定した。以下、各トレンチ調査の概略を述べていきたい。

第1トレンチ（T1）

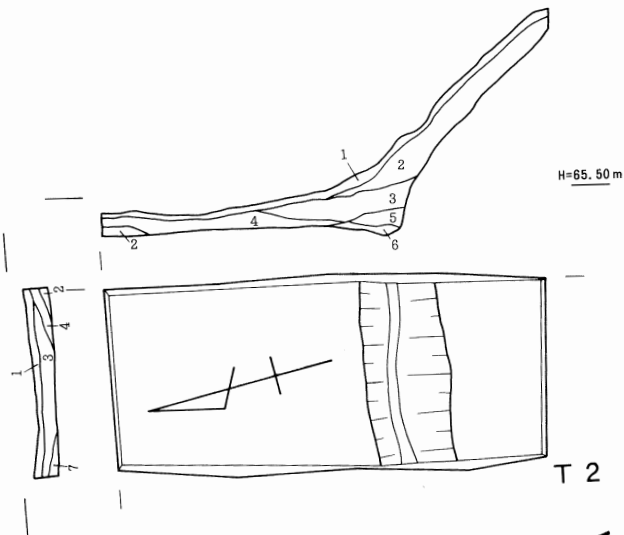
第1トレンチは、約標高65mの小規模な平坦面に設定したトレンチである。旧地表と考えられる有機質土壌の灰黄色粘質土の上に、黄褐色系の砂質土を盛り土して平坦面を作り出している。そ



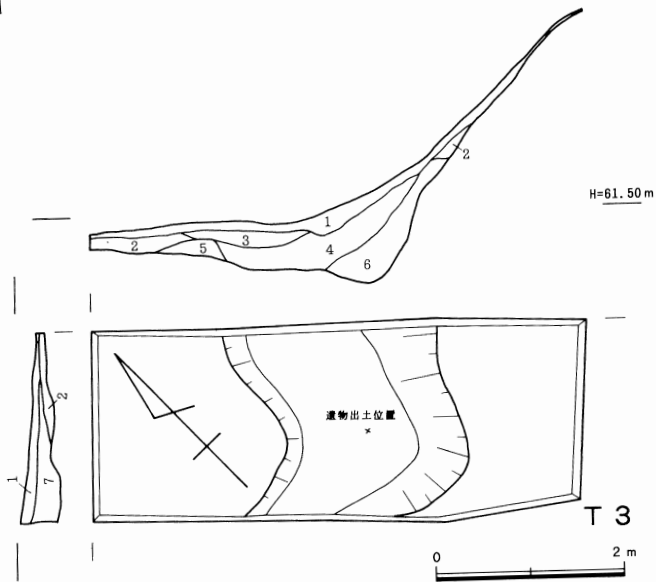
第3図 爵山城跡T3出土遺物実測図



- 1 表土 (褐灰色腐葉土)
- 2 黄褐色砂質土
- 3 明黄褐色砂質土 (やや濁る)
- 4 明黄褐色土砂質土
- 5 灰黄色粘質土 (におい黄褐色混、有機質)



- 1 表土 (褐灰色腐葉土)
- 2 黄橙色砂質土
- 3 明黄褐色砂質土 (濁る)
- 4 灰黄色砂質土
- 5 橙色砂土
- 6 灰色粘質土 (有機質)
- 7 明黄褐色砂質土



- 1 表土 (褐灰色腐葉土)
- 2 黄褐色砂質土
- 3 におい黄褐色砂質土
- 4 黄褐色砂質土 (炭化木、若干有機質)
- 5 明黄褐色砂質土地山混
- 6 橙色砂礫
- 7 灰黄褐色砂質土 (しまり悪し)

第4図 爵山城跡T1～T3平面図・断面図

の他柱穴などの遺構、遺物は出土しなかった。

土層は、1. 表土(褐灰色腐葉土) 2. 黄褐色砂質土 3. 明黄褐色砂質土(やや濁る) 4. 明黄褐色土砂質土 5. 灰黄色粘質土(にぶい黄褐色混、有機質)である。

第2トレンチ(T2)

第2トレンチは、第1トレンチを設定した平坦面から丘陵頂部の低い土塁状の地形に続く傾斜変換点にはほぼ直交するよう設定した。トレンチの観察からは、地山を掘削し平坦面を作り出しものと考えられる。背後の斜面の傾斜は、約60度である。斜面と平坦部の接点には、幅約30cm深さ約10cmの溝状の凹みが認められる。有機質の灰色粘質土を埋土とすることから、排水等の機能をもった遺構の可能性もあるが明確ではない。この他遺構、遺物は認められなかった。

土層は、1. 表土(褐灰色腐葉土) 2. 黄橙色砂質土 3. 明黄褐色砂質土(濁る) 4. 灰黄色砂質土 5. 橙色砂土 6. 灰色粘質土(有機質) 7. 明黄褐色砂質土。

第3トレンチ(T3)

第3トレンチは、標高約61mの調査区内の下段の平坦面から上段平坦面へつながる斜面に直交するトレンチである。ここでも第2トレンチと同様に、約65度の角度をもった傾斜面と平坦面を作り出した地山加工を確認した。斜面の下には変換点に沿って幅約60cm、深さ約10cmの溝状の落ち込みが認められたが、柱穴等の遺構は検出できなかった。

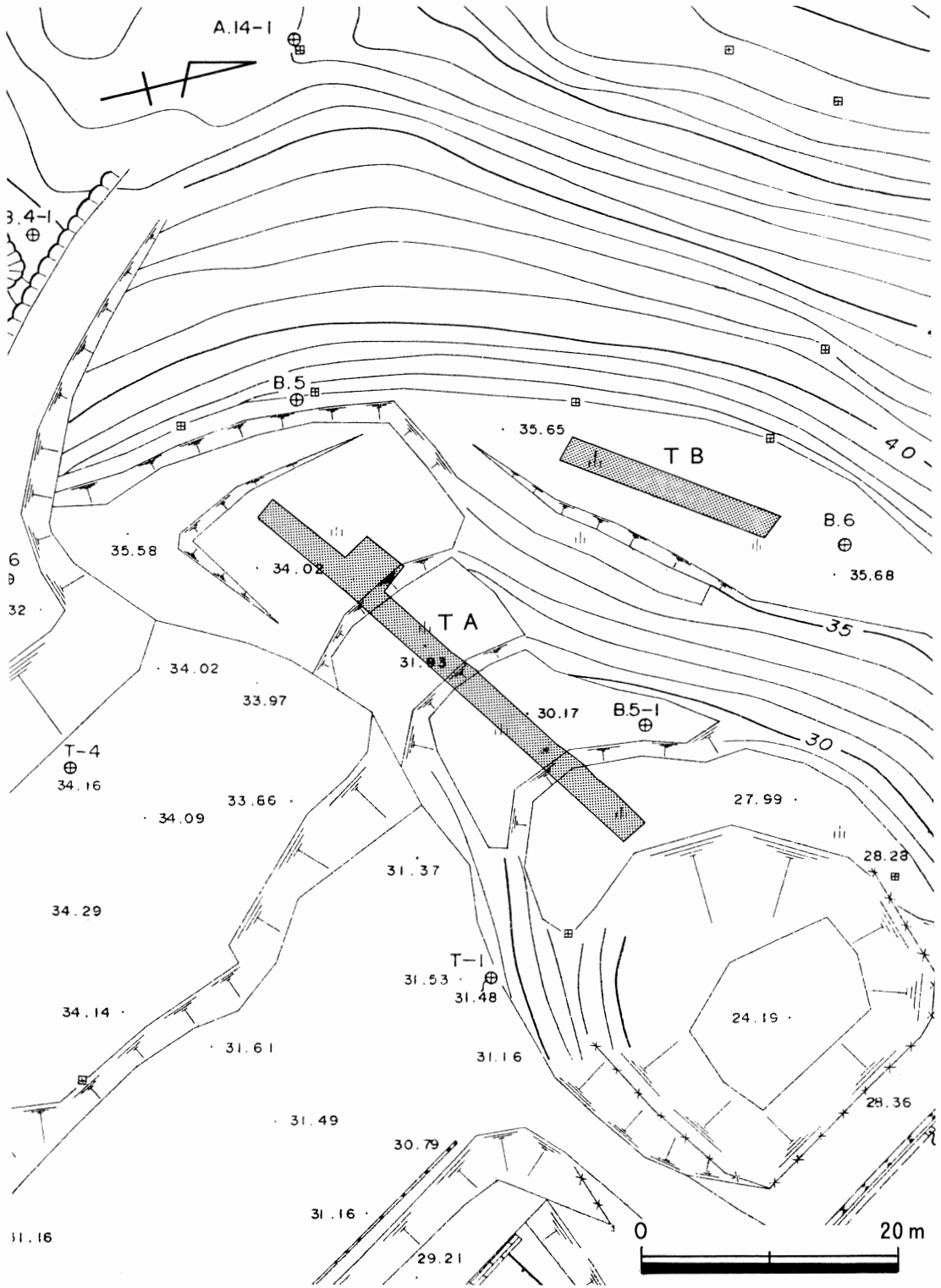
このトレンチからは、陶器片が1点出土している。出土位置は、溝状の落ち込みのほぼ中央である。陶器片は、内面を布などによる横ナデ、外面を指頭による不定方向の仕上げナデによる調整を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には1mm程度の小礫を含む。備前焼の大甕体部の破片と考えられる。

土層は、1. 表土(褐灰色腐葉土) 2. 黄褐色砂質土 3. 鈍い黄褐色砂質土 4. 黄褐色砂質土(炭化木若干含、有機質) 5. 地山混じりの明黄褐色砂質土 6. 橙色砂礫 7. 灰黄褐色砂質土である。

Ⅲ 大杙鐘鑄谷遺跡

1. 遺跡の位置と環境

大杙鐘鑄谷遺跡は、鳥取市の南東部の岩美郡国府町との境界に近い鳥取平野に位置する面影山と呼ばれる独立丘陵上に立地している。面影山は北西～南東方向に主稜線を延ばす、長さ約1.3km、幅約0.6km、標高110.3m、水田面との比高差約100mを測る丘陵で、JR鳥取駅の南東約2kmに位置し、市街地から国道29号線を南下して新袋川を渡るとすぐ東側にその西端部を見ることができる。今木山、甌山とともに因幡三山の一つに数えられるこの面影山からは大路山や空山といった鳥取平野南部一帯を、東は古代史の舞台である国府町の家並みを、さらに北に目を転じると稲葉山から市



第5図 大杓鐘鑄谷遺跡トレンチ配置図

民のシンボルともいべき久松山を一望のもとに見渡すことができる。

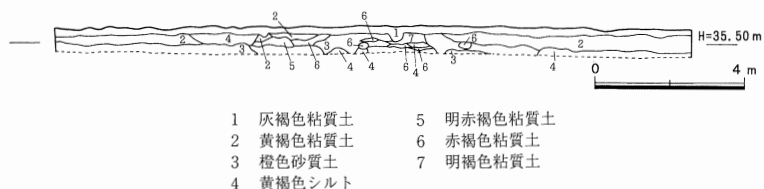
この地域はかつての法美郡にあたり、明治29年から岩美郡に所属し、昭和28年に鳥取市の一部となり現在に至っている。以前は水禍に苦しんだこの地域も大路川や新袋川などの河川改修工事以降肥沃な水田地帯として開け、丘陵麓に沿って雲山、正蓮寺、東今在家、大杣など集落が営まれ静かな農村地帯を形成していたが、現在では宅地の造成が急ピッチで進み市内でも有数の新興住宅地域となっている。

このように変貌を遂げつつある面影山丘陵周辺の平野は、地質的には沖積平野に特徴的な粘土質の堆積物によって形成され、水持ちが良く、初期の水稻耕作には適していたと考えられる。このことはこの地域が古代から生産基盤確保の好条件を備えていたことにほかならず、丘陵一帯の古墳群の造営はもとより、それ以前に遡る遺跡の形成に大きくかかわったであろうことは想像に難くない。

しかしながら本丘陵周辺には現在のところ先土器時代から縄文・弥生時代に遡る遺跡は知られておらず、最も近い縄文時代の遺跡としては唯一古郡家地内にトチ、アラカシといった堅果類の貯蔵穴が検出された晩期前半に属する大路川遺跡が知られるのみである。

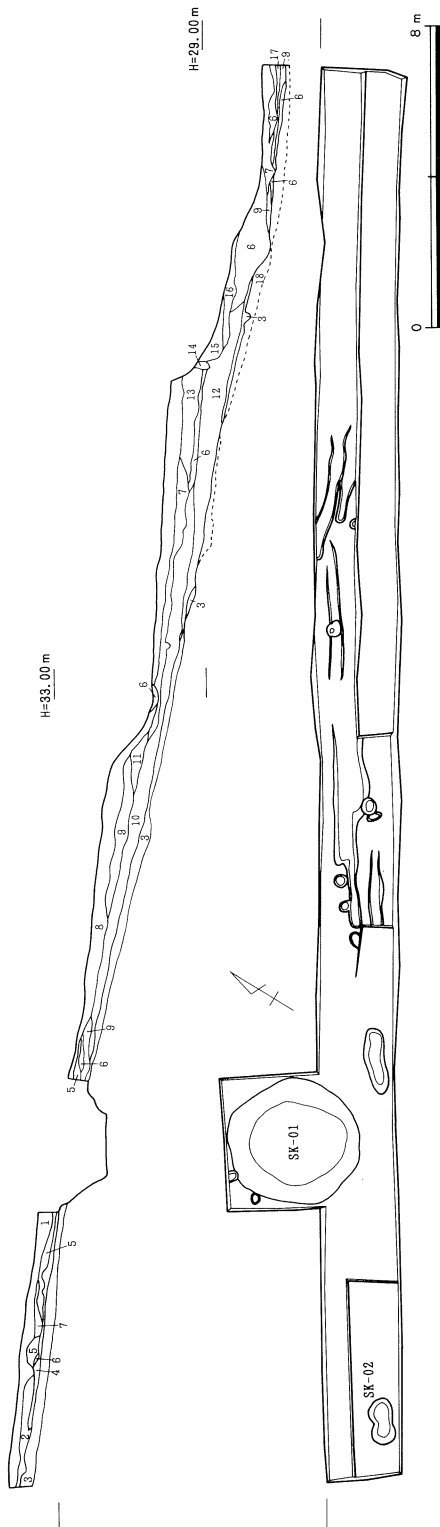
弥生時代の遺跡についても本丘陵周辺の実態は明らかではないが、平野南部の丘陵地については近年調査事例が増加してきている。最も古い集落遺跡としては前期末～中期初頭の壺甕類が出土した西大路土居遺跡が知られており、つづいて中期～古墳時代まで断続して営まれた掘立柱建物跡が検出された久末・古郡家遺跡、後期後半～古墳時代に至る多数の竪穴住居跡が検出された生山大池遺跡が知られている。また墳墓遺跡としては、それぞれが複数の埋葬施設を持つ後期後半のいわゆる墳丘墓2基が紙子谷遺跡門上谷地区で調査されている。そのほか、越路の樹園地内からは流水文銅鐸が出土している。

古墳時代にはいると鳥取平野南部の丘陵地帯には大小様々な古墳が築造され市内でも有数の古墳密集地帯を形成しており、それぞれのまとまりによって面影山、大路山、美和、古郡家、六部山、広岡といった古墳群に分けられている。その大半は小規模な方形墳や円墳によって形成されているが、この中には前・中期を代表する大型前方後円墳である古郡家1号墳(90m)、六部山3号墳(63m)が含まれ、これらの古墳は鳥取平野南部の首長墓と考えられている。またこの時期の小規模古墳は主として木棺、箱形石棺を埋葬施設とし、丘陵頂部や稜線上に比較的まとまりをもって築造されている。後期にはいると空山古墳群に見られるような横穴石室を内部主体とした群集墳が展開し、そ



第6図 大杣鐘鑄谷遺跡Bトレンチ断面実測図

- 1 にぶい橙色砂質土(⑥を混入)
- 2 にぶい褐色粘質土
- 3 灰褐色粘質土
- 4 褐色砂質土
- 5 褐色粘質土
- 6 褐色砂土
- 7 黄褐色粘質土
- 8 黄褐色粘質土
- 9 明黄褐色粘質土
- 10 にぶい黄褐色粘質土
- 11 にぶい明黄褐色粘質土
- 12 明褐色粘質土(レキ混入)
- 13 明褐色粘質土
- 14 褐色粘質土
- 15 褐色砂質土(⑥を混入)
- 16 明褐色粘質土(⑥を混入)
- 17 にぶい褐色粘質土
- 18 明黄褐色粘質土(レキ混入)



第7図 大代鐘鑄谷遺跡Aトレンチ平面図・断面図

の中には鳥、木、葉、人物、三角文などの線刻壁画を伴う古墳も含まれており一つの特徴となっている。近年調査された広岡古墳群からは多数の副葬品とともに金銅装圭頭大刀や銀象嵌大刀が出土し、当該地後期古墳の実態解明の重要な資料となっている。

なお古墳時代の集落遺跡の調査事例は少なく、知られるものも弥生時代から継続して営まれた前期の遺跡がほとんどで、中期の堅穴住居跡1棟を検出した生山大池遺跡や同3棟を検出した広岡西矢谷遺跡のほかは中期・後期の遺跡はこれまでのところ知られておらず実態は不明のままである。その他には古墳時代に関連する遺跡として古式須恵器が採取された越路の須恵器古窯跡群があげられる。

歴史時代にはいと面影山丘陵東側の平野部には因幡国庁、因幡国分寺が近接して設けられ、これらの遺跡の調査からは当該の遺構とともに若干の中世遺構や遺物が検出されている。

以上のように面影山周辺の平野部は早くから中央との結び付きを深めるとともに鳥取平野の政治的文化的中枢として発展し消長していった地域であるといえよう。

2. 発掘調査の概要

大杙鐘鑄谷遺跡は、鳥取市大杙字鐘鑄谷377番地他に所在する。今回の試掘調査は民間企業の宅地開発事業に伴うものである。調査場所は、地元研究者によって江戸時代の梵鐘鑄造跡と指摘がなされていた地区を対象に実施した。

調査は、梵鐘鑄造遺構の確定とその遺存状況の確認を主眼に置いて実施した。調査トレンチは、A、B2本設定し順次掘り下げていった。遺跡は、面影山丘陵のうち西側部分にあり、稜線に近い北向き斜面に立地する。遺跡の現状は、雑木が生い茂る山林となっており、立木を伐開すると谷筋に4段のテラス状の地形が現われ、北側の一段高い部分にも平坦部が認められた。地元の人の話では、このテラスは以前田畑として利用していたということである。研究者の教示では、この谷筋のテラス部分で梵鐘の鑄造が行なわれたと推定されているということであった。トレンチは、これらの意見を参考にして谷筋の中央に1本(TA)、北側の上段テラスに1本(TB)設定した。

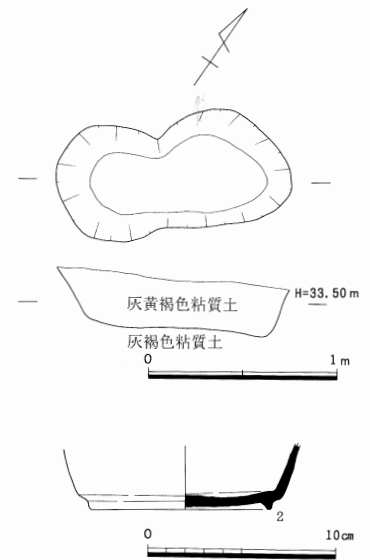
Aトレンチ (TA)

Aトレンチは、谷筋に沿ってテラスに直交する幅2m、長さ38mのトレンチである。このトレンチでは、最上段のテラスからSK-1、2の土坑2基を検出した。

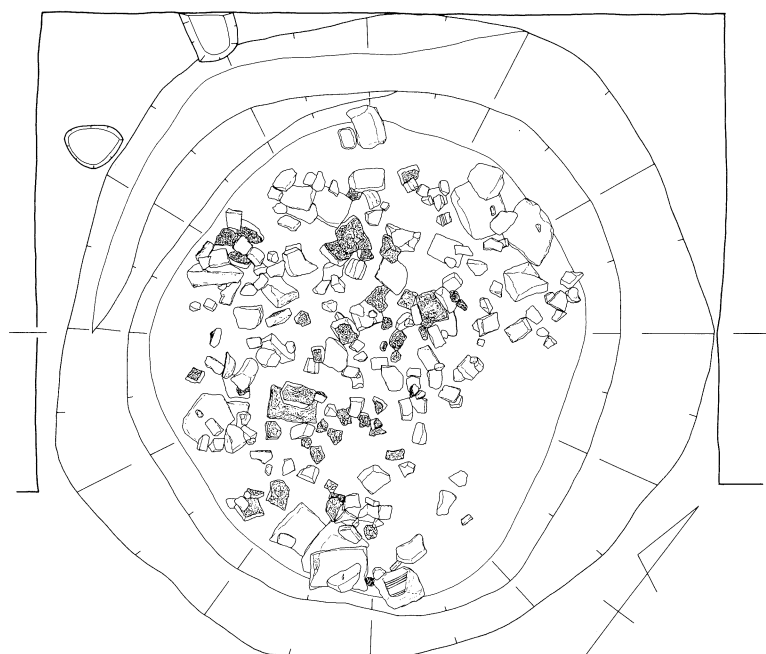
SK-1は、トレンチの上端から約7mほど下の北側部分で検出され、梵鐘鑄造関係遺物が出土したのでトレンチを拡張して土坑の全体を調査した。上縁の直径3.5mのほぼ真円に近い土坑で、現地表面から約0.4m下で検出した。底部の形態はやや不整の円形で長径2.5m、短径2.2mを測る。深さは検出面から1.2mを測るが、中段でやや傾斜の変換が認められる。埋土中から梵鐘鑄型片、溶解炉片が多量に出土した。土坑の底部、内壁等には加工の痕跡、熱による変化は認められない。

この土坑からの出土遺物は、溶解炉片コンテナ11箱、鑄型(外型含む)コンテナ9箱、銅塊1点、染付片2点、瓦片5点、須恵器片1点である。主要な遺物について概略を記していきたい。3は須恵器甕の肩部。4、5は染付碗で、胎土はともに緻密である。5の高台端部には釉の拭き取りが見られる。6~10は瓦片ですべて平瓦の破片である。胎土は良好だが焼成は甘い。11は、羽口を半裁したような形態を呈し、指頭によって整形をする。色調は橙色だが外面の一部には比熱により灰色に変色している部分が見られる。胎土は、1~8mm程度の小礫を多く含む粗いものである。用途は不明である。

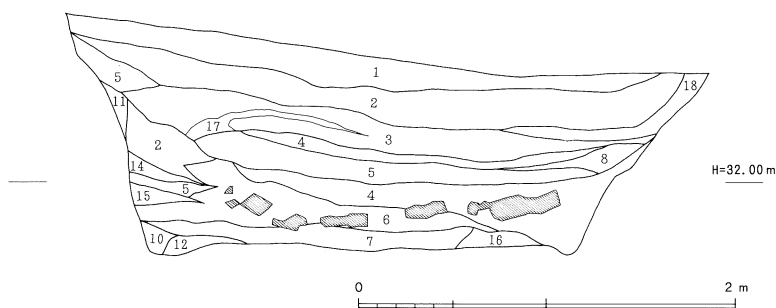
12~40は、梵鐘鑄造に直接かかわる遺物である。12は復元径26.2cmを測る。二次焼成を受けた痕



第8図 大杙鐘鑄谷遺跡SK-02平面図・断面図・出土遺物



- 1 明黄褐色砂質土
- 2 明褐色砂質土
- 3 橙色粘質土
- 4 におい褐色粘質土
(⑧を混入、炭化物)
- 5 黄褐色粘質土
- 6 灰色粘質土(⑦を混入)
- 7 青灰色砂質土
- 8 橙色粘土
- 9 におい赤褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 褐灰色粘質土
- 12 青灰色砂質土(⑬を混入)
- 13 明赤褐色粘土(レキ混入)
- 14 橙色砂礫
- 15 褐色粘土
- 16 暗褐色粘質土(⑬を混入)
- 17 灰
- 18 褐色粘質土(橙色粘土混)



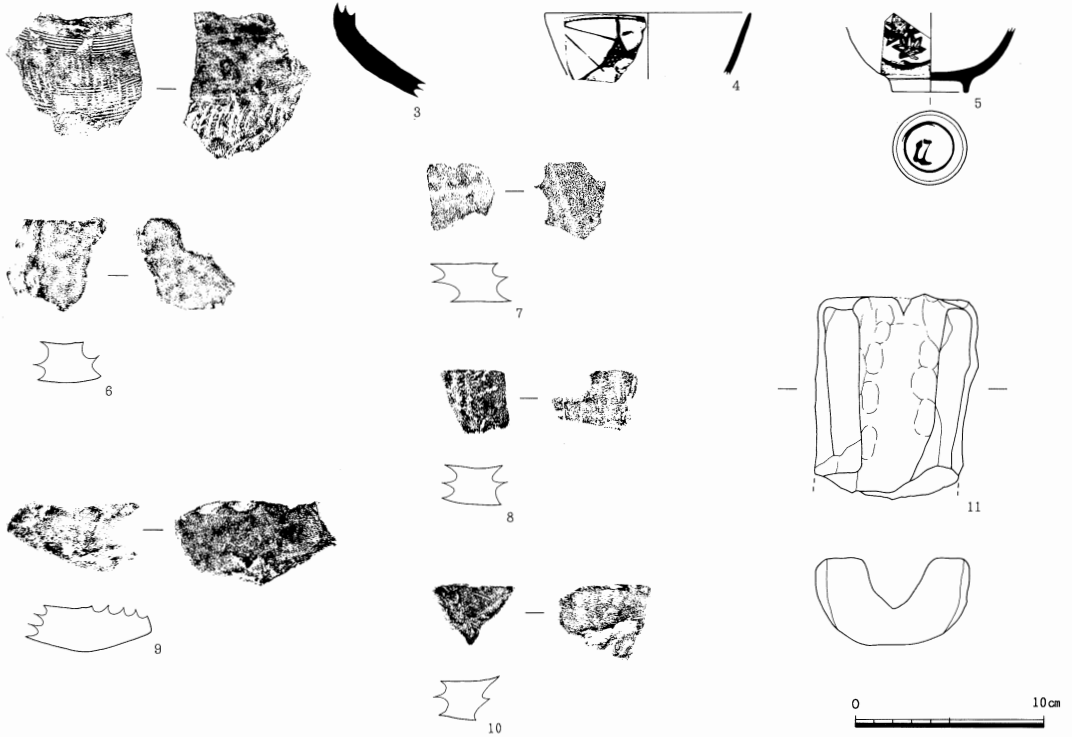
第9図 大杵鐘鑄谷遺跡AトレンチSK-01平面図・断面図

跡は無い。13は外面の一部に被熱を受け灰色に変色している。復元径53.2cmを測る。内型(中子)であろうか。14は13とほぼ同じ形態であるが、復元計は77cmを測り、二次焼成も受けていない。15は円筒形の遺物で外面には強い熱を受けておりひび割れが生じ暗青灰色に変色している。

16、17は、撞座の鑄型である。16は復元径13.7cm、推定花卉数8葉の蓮華文である。中房は中心の蓮子に8顆の蓮子を配する。17も同様の形態だと思われるが花卉の大きさから別個体であろうと判断した。色調は内側の型面から暗灰色、黄色、灰色、橙色へと熱伝導の順に変化する。

18～35は、凸帯部分の鑄型である。断面形は三角形、台形、山形と様々である。胎土はすべて全体的に砂っぽく粗いものであるが、型面のみは密である。色調は、撞座と同様に灰色系から橙色系へと変化する。図で黒く塗りつぶした部分が二次的に被熱を受け暗灰色に変色した部分で、厚さは約1～2mmである。

36～40のうち39を除いて、すべて一面に段違いの面をもっており同じ形態を呈している。型面の



第10図 大杙鐘鑄谷遺跡AトレンチSK-01出土遺物実測図

部分は被熱により灰色系の色調を呈す。型どうしの組み合わせ部分であろう。なお、36～38には4状の沈線状の痕跡が認められる。

この他写真図版15に示した笠形の鑄型が4個体出土している。径約4cmで単葉12弁の蓮華文である。花卉の幅6mm、長さ18mmを測る。乳にあたるものであろうか。

溶解炉片と考えられる遺物も多く出土しているが、いずれも7～8cm程度の厚さで、内側1.5cm程度加熱を受けて変色しており、表面はガラス質となっているものも多い。

SK-2

トレンチの西端で検出された中央部にくびれのある不整形の土坑である。長軸1.2m短軸0.5mを、深さ0.3mを測る。埋土中から高台付きの杯身が一点出土しているが、遺構の性格、用途を明らかにすることができない。

杯身は、口縁部を欠くが他はよく残っている。高台は貧弱で、口縁部は外方へ開く。焼成は不良で調整は不明である。法量は、残存高3.3cm、高台径9.5cmを測る。奈良期のものと見て大過ないであろう。

Bトレンチ(TB)

北側の一段高いテラスに設定した幅2m、長さ17mのトレンチである。丘陵をカットして平坦部を作り出しているが、梵鐘の鑄造に関する遺構等は検出することができなかった。



第11図 大杙鐘鑄谷遺跡AトレンチSK-01出土遺物実測図

IV 里 仁 遺 跡

1. 遺跡の位置と環境

里仁遺跡は、鳥取平野の中央を流れる千代川の左岸の鳥取市里仁地区に所在し、JR鳥取駅の西方約3.5kmの国道道路と通称吉岡街道とに挟まれた水田地帯に位置する。里仁遺跡を含む鳥取平野西部に人々の足跡がしるされたのは縄文時代である。鳥取平野内の縄文遺跡は、従来から千代川右岸、左岸の遺跡立地の特徴的な差異が注目されてきた。右岸の砂丘地に立地する遺跡に対して左岸の青島遺跡、桂見遺跡、布勢グラウンド遺跡などの平野縁辺部の遺跡については「低湿地遺跡群」として捉えられている。これらの遺跡は、前・中期及び晩期土器なども少量出土しているようであるが、いずれも後期を主体とする遺跡である。1976年(昭和51)に発見され発掘調査が行なわれた桂見遺跡は、後期初頭を主体とする遺跡で、土器のほかに木製のかい、おびただし量の椎・栃の実などの植物遺体が出土し、鳥取県における縄文時代研究の画期となった。青島遺跡は、後期中葉を主体とするが、一部晩期に及んでいるようである。布勢グラウンド遺跡は、1980年(昭和55)には国民体育大会開催に伴うグラウンド改築工事の事前調査が実施された。この調査によって漆で彩られた木器、もじり編みのカゴなど豊富な木製品が出土し、桂見遺跡と並んで西日本の代表的縄文遺跡として脚光を浴びることとなった。布勢グラウンド遺跡出土の縄文式土器は後期中葉の時期が与えられている。この遺跡は、高度の技術を要求されるすぐれた漆製品の出土に見られるように、この地域の縄文文化の豊かさを示している。従来、東日本のそれと比べて相対的に貧弱であると見られる傾向にあった西日本の縄文文化が再検討される契機となるものであった。

縄文時代晩期後半になると始めて平野中心部にその足跡を残すようになる。この時期の遺跡として古海遺跡、岩吉遺跡をあげることができる。古海遺跡は、千代川左岸の自然堤防上に営まれた代表的な晩期後半の遺跡である。

ほかにこの地域にあって縄文土器を出土した遺跡として、大柵遺跡、天神山遺跡、湖山第2遺跡などをあげることができる。しかし、いずれの遺跡も少量の土器片の出土にとどまっており、詳細は不明である。

弥生時代前期の遺物が出土した遺跡として、本遺跡のほか青島遺跡、湖山第2遺跡、布勢グラウンド遺跡が知られている。これらの遺跡は、いずれも断絶はあるものの縄文時代の遺跡分布と重なっている。各遺跡とも断片的な土器の出土であり、この地域の弥生時代前期の実態はなお検討を要するものと考えられる。しかしながら1981年(昭和56)に鳥取大学付属小中学校の移転に伴って調査された湖山第2遺跡からは遺構(掘立柱建物)が検出されているようなので今後に期待したい。

中・後期の遺跡としては前述の遺跡が引き続き営まれるほか、布勢グラウンド第2遺跡、天神山遺跡、古海遺跡、大柵遺跡、山ヶ鼻遺跡、桂見遺跡、湖山池湖底遺跡などが営まれるようになる。これらの遺跡は、それぞれ断続しつつも古墳時代へと引き続き営まれている。近年まで弥生時代集

落については具体的には何もわからない状態であったが、最近の湖山池周辺の開発事業に伴う事前調査の増大によって、竪穴住居跡などの遺構が続々と検出されている。布勢グラウンド第2遺跡で古墳時代を含めて8棟、湖山第2遺跡で25棟、帆城遺跡で1棟の竪穴住居跡が検出され、掘立柱建物なども調査されている。布勢グラウンド第2遺跡、帆城遺跡、岩吉遺跡からは、管玉未製品、玉砥石、擦り切り工具等の玉作り関係遺物が出土しており、この地域の弥生集落の特徴となっている。これら弥生集落の中で興味深い遺跡として湖山池湖底遺跡がある。高住集落の沖合約500mの湖山池湖底(水深2m前後)から弥生土器、土師器が採集されている。潟湖である湖山池の消長などの地形変化や集落立地などの変遷を考える上で非常に貴重な遺跡である。

これらの集落跡と密接な関係を持つ弥生時代の遺跡として、湖山池東南岸の高住銅鐸出土地、塞ノ谷遺跡、西桂見遺跡、桂見墳墓群をあげることができる。高住銅鐸は、梨園造成中に村社南側山腹から出土したと伝えられている流水文銅鐸である。塞ノ遺跡は、湖山池最大の島である青島の対岸に位置し、湧泉を中心に展開されたと考えられる祭祀遺跡で古墳時代まで継続して営まれる。1973年(昭和48)の調査では舟、刀などの木製模造品や土器類が出土している。1981年(昭和56)に調査された西桂見遺跡の四隅突出型方形墓は、地山の削り出しと盛土によって一辺64m、高さ5mの規模を作り出し、張石と列石を巡らした弥生時代後期末の墳墓である。墳丘上に樹立されていたと考えられる仮器化した大型特殊土器類とともに、弥生墓制から古墳の出現という時代の画期の解明に新たな問題を投げかけている。この西桂見遺跡周辺は、弥生時代後期の墳墓遺跡が集中して発掘調査されている。

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上には大小様々な古墳が造られるようになる。全長92mの橈岡1号墳をはじめとして里仁29号墳(81m)、布勢1号墳(59m)、古海36号墳(67m)、大熊段1号墳(51m)、三浦1号墳(36m)などの前方後円(方)墳が含まれており、方形墳、円墳を主体とする小型墳は、湖山池南西～南東岸、野坂川流域の丘陵地帯に数多く造られている。

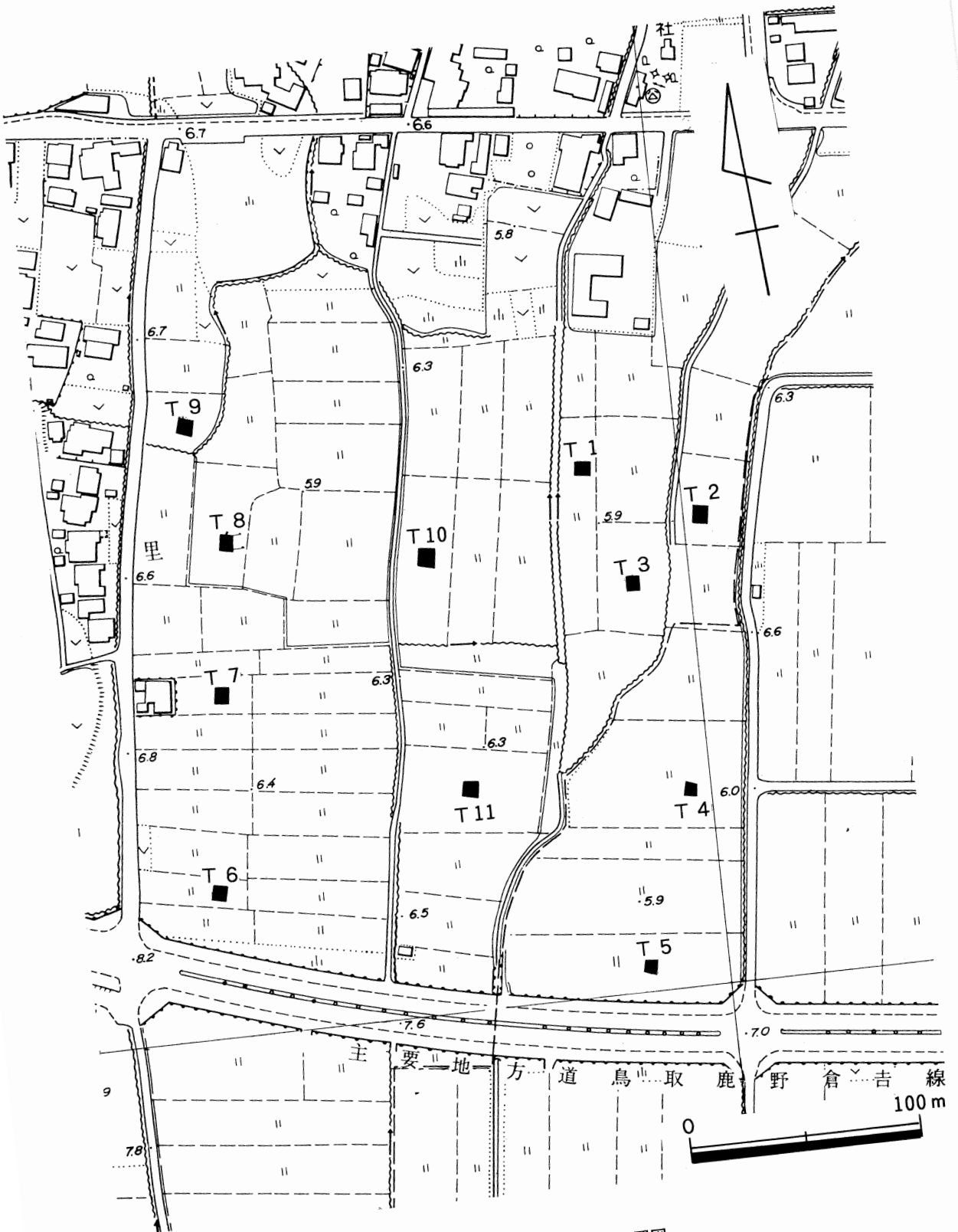
千代川左岸の古墳は、右岸の古墳に比較して発掘調査例が少なく内部構造など不明の点が多いが、近年桂見古墳群、倉見古墳群、里仁古墳群、吉岡古墳群、徳尾古墳群等など古墳時代前・中期の中小規模古墳の調査事例が増加している。桂見古墳群は、1983年(昭和58)に古墳時代前期の方形墳3基が調査された。長辺28mを測る2号墳からは、舶載の内行花文鏡、斜縁帯帯鏡が出土した。里仁古墳群では、国民体育大会関連施設の建設にともなって1984年に4基が調査された。いずれも弥生時代からの伝統を受け継ぐ一辺15m前後の方形墳で、このうち2基の古墳の埋葬施設には箱形石棺が採用されている。調査によって33号墳から豊富な鉄製武器、工具が、32号墳からは鱗付壺円筒埴輪と名付けられた類例のない埴輪が出土している。

千代川下流左岸では後期の横穴式石室を内部主体とする古墳は少なく、北村古墳群、高住古墳群、吉岡古墳群などでわずかに知られているだけで、鳥取平野での古墳分布の一つの特徴として理解されている。石室の構造から見ても、千代川左岸の石室に特徴的な中高天井の石室は確認されておら

ず、千代川右岸との際立った差異となっている。このような後期古墳の分布状況の中で、巨石を刳り抜いた石棺型石室を持つ山ヶ鼻古墳(古海13号墳)が野坂川左岸丘陵の東側斜面に築造されている。その特徴ある石室構造とともに、数少ない千代川左岸の後期～終末期古墳として貴重な存在といえる。

古墳時代の集落跡の多くは、弥生時代の集落に重なって形成されているようである。岩吉遺跡や先述の湖山第2遺跡、布勢グラウンド第2遺跡、大柵遺跡などはこの好例であると考えられる。大柵遺跡は、1977年(昭和52)、1982年(昭和57)の2回の調査で微高地上から竪穴住居跡、土壇墓などが検出され「ムラ」跡の一端が明らかとなった。ほかに古墳時代の遺跡として、千代川下流左岸の自然堤防上に営まれた秋里遺跡が知られている。最近の調査で弥生時代後期まで遡ることが判明したが、古墳時代を中心として奈良・平安時代まで続く祭祀遺跡と考えられている。土器溜め状の土坑、土器群、土器列などの遺構から大量の土器とともに、鳥舟形土製品、船形土製品、石製模造鏡などの祭祀遺物が出土している。

律令体制下のこの地域は、東大寺領高庭荘として開発が進められたことが『東大寺東南院文書』などの史料に見え、条里制との関連からの研究もなされている。記録にも見られるとおり、この地域に条里制が施行されていたことは確かであろうが、条里遺構復元の手がかりは必ずしも多いとはいえない。文献によれば湖山池東岸から南東岸の田名として船負田、倉見田、葦原田、草尾田などの地名が見られ、それぞれ現在の布勢、桂見、里仁などの地域に比定されている。この時期(8世紀半ば～11世紀初頭)の遺物は桂見、大柵、古海などの遺跡から出土しているが、発掘調査が十分に行われていないため集落の実態は不明である。いずれにしても、条里地域の開発に際してこの地域の豪族の積極的な働きがあったはずで、前記文献史料にも墾田長として国造勝磐の名も見られる。その後高庭庄は、東大寺の政治的地位の低下や、自然条件の変化による開発の困難性によって高庭庄の経営も悪化し、10世紀の後半には完全に没落していったと考えられている。律令体制下に消長していったこの地域の豪族の系譜を示唆するものとして、土師百井式軒丸瓦を出土し白鳳時代後期の創建になる菖蒲廃寺、土師氏につながる大野見宿禰命神社などがある。東大寺領高庭荘の開発に深く関与していた古代因幡氏もこの地域を背景とした地方豪族であったと思われ、具体的に証する文献などは明らかではないが、土師氏との結びつきも深かったと考えられる。



第12図 里仁遺跡トレンチ配置図

2. 発掘調査の概要

先述のとおり調査対象地区は、国体道路と通称吉岡街道とに挟まれた水田地帯の自動車学校移転建設計画地である。西側は小丘陵となり、山裾には集落が立地する。調査の地番は第1表のとおりであるが、一部徳尾地区を含んでいる。発掘調査は、遺構の分布、密度、深さ等を確認することを主眼をおいてトレンチ掘り下げによって実施した。トレンチは、施設建設予定地全体をカバーするよう合計11ヶ所を設定した。以下、両トレンチの概略を述べていきたい。

第1トレンチ（T1）～第5トレンチ（T5）

第1トレンチから第5トレンチは、調査区の東側に設定したトレンチである。この5ヶ所のトレンチの土層は基本的に同じで、水田耕作土の下に褐灰色粘質土系の堆積があり、その下は灰色系の砂層となる。褐灰色粘質土系の土層は、マンガン分の沈着が見られ無遺物層である。灰色の砂層は、第1トレンチで標高2.6m、第2トレンチで標高4.2m、第3トレンチで標高2.7m、第4トレンチで標高4.2m、第5トレンチで標高4.0mで検出された。各トレンチとも遺構は検出できなかった。

この土層の観察から、調査区の東側は野坂川の氾濫による堆積ないし旧河道の可能性が考えられる。砂層中には弥生時代後期のものと考えられる土器が、各トレンチから数片ずつ検出されたが直接遺構との関わりは無いものと考えられる。第15図42は、比較的残りのよい器台で、前述の砂層から出土した。43は土師器の甕口縁部で、古墳時代前期に位置付けられる。

第6トレンチ（T6）、第7トレンチ（T7）

第6、第7トレンチは、調査区の南西部分に位置するトレンチである。水田耕作土の下は、褐灰色系の砂質土となり、その下に鉄分の沈着が見られる灰色系の粘質土となる。この粘質土の下層は、暗灰色系の粘土層となる。この土層は標高2.6mからはじまり、弥生時代中～後期を中心とした土器の細片を若干含む。両トレンチとも遺構は検出されなかった。下層の暗灰色系の粘土層にも鉄分の沈着等が見られることから葦などの湿地性植物の成育する湿地であったと考えられる。第15図44、45は第6トレンチから出土した壺肩部と甕底部である。

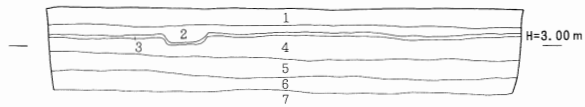
第8トレンチ（T8）

第8トレンチは、水田耕作土下に褐灰色のシルト層が入り、その下標高2.35m付近で灰色系の粘土となる。この粘土中からは比較的多くの土器片が出土したが、遺構は検出されなかった。包含層である灰色系の粘土層の出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類が混在しており、時期を特定するは困難である。標高2.0m付近で無遺物層である灰白色の粘土層となる。第15図46～49は弥生時代の壺甕類の底部、50は古墳時代前期の高杯である。

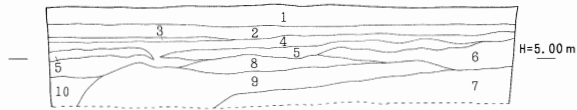
第9トレンチ（T9）

第8トレンチと同様に調査区の北西隅に設定したトレンチである。西側の山裾に立地する集落に最も近接している。

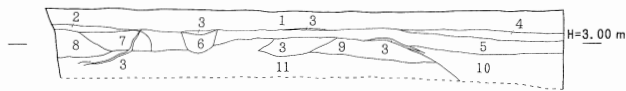
このトレンチの土層は、耕作土の直下標高3.3mで黄褐色のローム層となり、他のトレンチと異



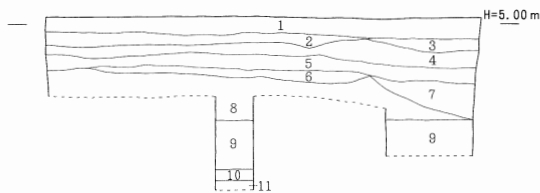
- | | |
|----------------|-------------|
| 1 耕土(明褐色粘質土) | 5 褐灰色シルト |
| 2 床土(灰色シルト) | 6 青灰色シルト質細砂 |
| 3 黄褐色粘質土(鉄粉沈着) | 7 青灰色細砂 |
| 4 褐灰色粘質土 | |



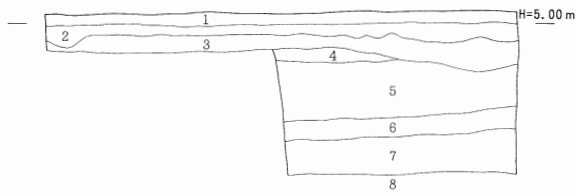
- | | |
|----------------|-------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) | 6 灰色シルト質粘土 |
| 2 床土(灰色シルト) | 7 灰色粘質土 |
| 3 黄褐色粘質土(鉄粉沈着) | 8 暗灰色シルト質細砂 |
| 4 褐灰色粘質土 | 9 暗灰色粗砂 |
| 5 灰色粗砂 | 10 暗灰色粘質土 |



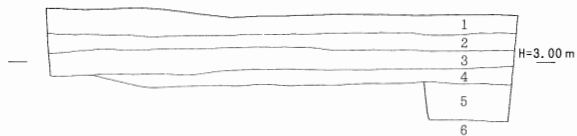
- | | |
|-------------|--------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) | 7 灰褐色シルト質細砂 |
| 2 床土(灰色シルト) | 8 灰褐色シルト |
| 3 黄褐色粗砂 | (マンガン分沈着) |
| 4 褐灰色シルト | 9 灰色粗砂 |
| 5 暗灰色シルト質細砂 | 10 暗灰色シルト質細砂 |
| 6 灰褐色粘質土 | 11 灰色細砂 |



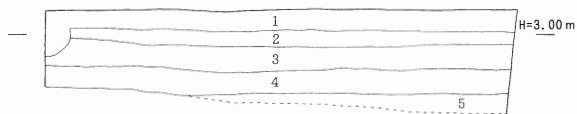
- | | |
|-------------|-----------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) | 7 暗灰粗砂 |
| 2 明黄褐色シルト | 8 灰色粗砂 |
| 3 明黄褐色細砂 | 9 灰色粗砂(灰色粘土混) |
| 4 褐灰色シルト | 10 青灰色粘土 |
| 5 暗灰色シルト質細砂 | 11 暗褐色粘土(植物遺体含) |
| 6 明黄褐色粗砂 | |



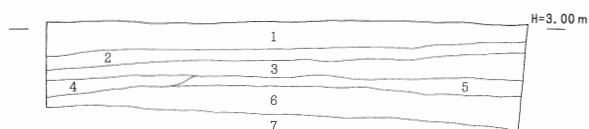
- | | |
|-------------|----------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) | 5 青灰色シルト質細砂 |
| 2 床土(灰色シルト) | 6 青灰色細砂(灰色粘土混) |
| 3 灰褐色粘質土 | 7 青灰色粘土 |
| 4 黄灰色シルト質細砂 | 8 青灰色粗砂 |



- | |
|------------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) |
| 2 褐色砂質土(マンガン分沈着) |
| 3 灰色粘土(鉄粉沈着) |
| 4 暗灰色粘土(炭酸鉄沈着) |
| 5 暗灰色粘質土 |
| 6 灰色粘土 |



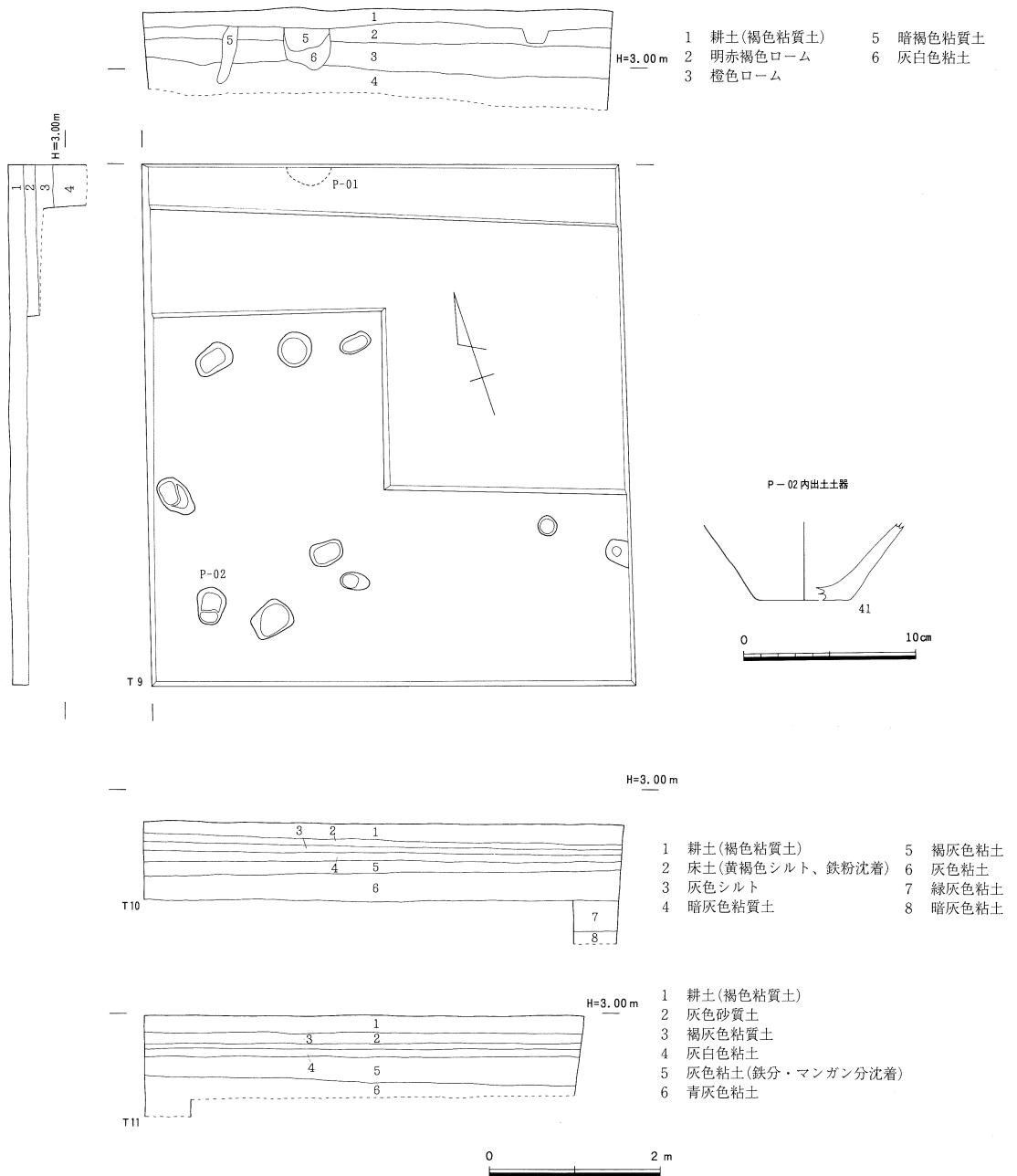
- | |
|-----------------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) |
| 2 褐色砂質土(マンガン分沈着、炭化物含) |
| 3 暗灰色粘土(鉄粉沈着) |
| 4 褐灰色粘土(炭酸鉄沈着) |
| 5 明灰色粘土(炭酸鉄沈着) |



- | |
|-----------------------|
| 1 耕土(褐色粘質土) |
| 2 褐色砂質土(マンガン分沈着、炭化物含) |
| 3 褐灰色粘土 |
| 4 灰色細砂(暗灰色粘土混) |
| 5 灰色粘質土 |
| 6 灰褐色粘土 |
| 7 灰白色粘土 |



第13図 里仁遺跡1・2・3・4・5・6・7・8トレンチ断面図



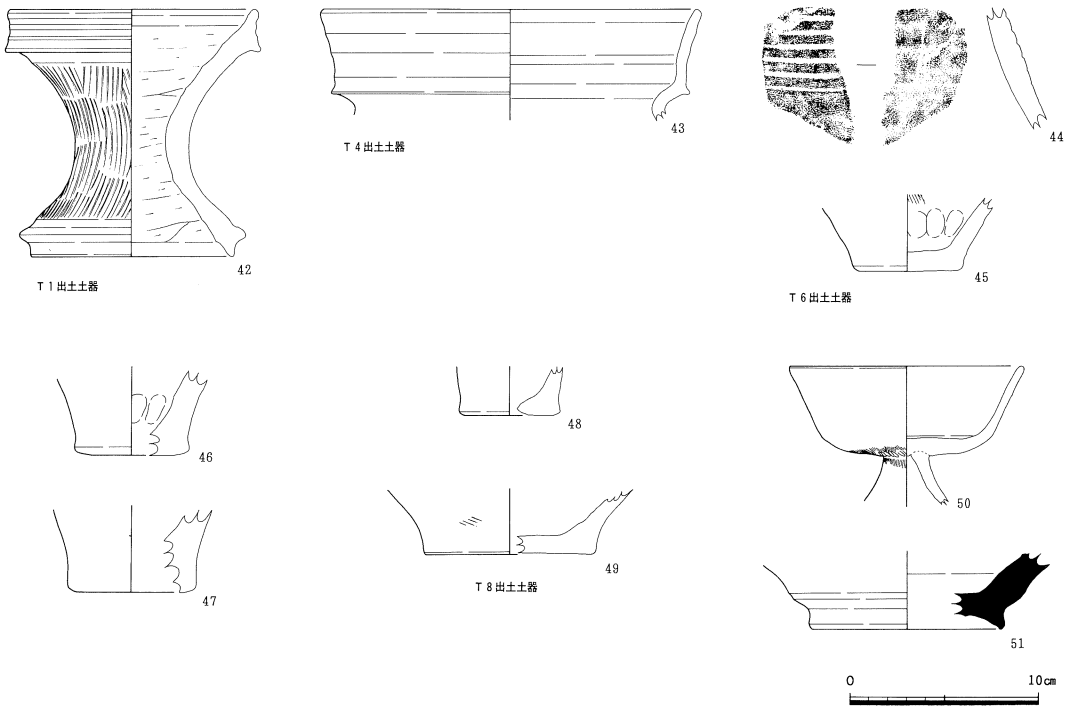
第14図 里仁遺跡9トレンチ平面図・断面図・出土遺物、10・11トレンチ断面図

なっている。このトレンチでは、このローム層を掘り込む柱穴状遺構が11基検出された。柱穴状遺構のうち一基は明らかに掘立柱建物の柱穴(P-01)で、中から柱根を検出している。

いずれの柱穴状遺構の埋土もおおむね褐色系の粘質土で単一層である。これらの遺構の時期を明確にする遺物の出土は認められなかったが、1基の柱穴状遺構(P-02)からは弥生時代後期と考えられる壺甕類の底部が出土している。

第10トレンチ (T10)、第11トレンチ (T11)

調査区のはほぼ中央に設定したトレンチである。耕作土の下は褐灰色系のシルト層となり、その後灰色系の粘土層となる。粘土層となる高さはT10で標高1.7m、T11で標高2.3mである。この粘土層は全くの無遺物層であり、鉄分、マンガン分の沈着も見られない。



第15図 里仁遺跡1・4・6・8・トレンチ出土遺物実測図

第1表 里仁遺跡トレンチー覧表

トレンチ 番号	地 番	規 模 (m)	検 出 遺 構	出 土 遺 物	備 考
1	里仁字上宮田77-1	5.0×5.1	—	弥生土器、土器細片	
2	里仁字築尾軍田67	5.1×6.1	—	土器細片	
3	里仁字上宮田76-3	4.4×4.9	—	土器細片	
4	徳尾字長田562	3.6×4.3	—	土師器、土器細片	
5	徳尾字長田565-1	4.1×4.9	—	土器細片	
6	里仁字竹ヶ鼻94-2	4.9×5.2	—	弥生土器、土器細片	
7	里仁字竹ヶ鼻90-4	4.9×6.2	—	土器細片	
8	里仁字六反長狭間87-2	5.0×5.1	—	弥生土器、土師器、 須恵器、陶磁器片	弥生～中世
9	里仁字堂ノ元240-4	5.6×6.1	柱穴状遺構11基	柱根、弥生土器、 土師器、須恵器	弥生～中世
10	里仁字六反長狭間80	5.9×6.3	—	土師器、須恵器、 陶磁器片	古墳～中世
11	里仁字菱田98	5.2×5.4	—	—	

V ま と め

1. 爵山城跡

爵山城跡については、江戸時代の文献である『因幡志』『因幡民談記』『因伯古城跡図志』に見ることができる。『因幡志』には小西采女正の城であったとあるが、具体的な築城時期及びその後の消息についてもつまびらかではない。爵山城跡の現状は、『因伯古城跡図志』の絵図とおおむね符合し、尺山（爵山）山頂から卯垣方面に延びる丘陵先端部を堀切によって切り離し、城郭の主要部分を形成する。二段の中心の曲輪は、『因伯古城跡図志』によれば、上段が「長二十間横十五間位」下段が「十間四方位」である。中心の曲輪も堀切によって防御されている。古文献では触れられていないが、曲輪の周囲にはわずかに土塁とも考えられる高まりが認められる。

調査地は、下段の曲輪からさらに北川に下った長さ10m幅5m程度の2ヵ所の小平坦地である。いずれの小平坦地も丘陵を切削して作り出したものであることが確認されたが、地上の構造物等を推定するまでには至らなかった。いずれにしても、出土遺物の年代観などから戦国時代の山城に係るものであることは確かである。

爵山城跡における今回の調査はごくわずかの調査面積であり、縄張等の詳細な調査もできなかったため十分な成果を得たとはいえないが、今後の山城調査の足掛かりになったといえよう。

2. 大杙鐘鑄谷遺跡

大杙鐘鑄谷遺跡は、地元面影地区で郷土史の研究を長く続けている面影郷土史研究会の人々の研究の中で所在地が特定された。研究によれば、今回発掘調査した大杙鐘鑄谷では、寛延2年（1749）に鳥取市内寺町の正眼山光明寺の鐘を鑄造したと藩の記録である『在方諸事控』に見えるとのことである。この鐘は、太平洋戦争末期に軍の命令で供出され三菱鉱山直島精煉所に送られ、兵器になったという。その時の直島精煉所の記録には、この光明寺の鐘について、「100貫、加賀田久平藤原房則、同後見父加賀田河内守平助」と記されているという。

発掘調査では、Aトレンチから梵鐘鑄造に係る土坑1基を検出した。土坑からは梵鐘鑄型片、溶解炉壁などが多量に出土した。土坑は比較的丁寧掘り込まれているが、土坑底部の状況、遺物の出土状況等から、梵鐘鑄造後の鑄型、溶解炉等の廃棄土坑と判断した。出土遺物の概略は先に記した通りである。

出土した中子と考えた鑄型片がその大きさからすれば2種類あり、必ずしも鑄造された鐘が1個体とはいえ、また、文献記録では、光明寺の鑄造時にすでに鐘鑄谷という地名が既にあったと考えられることから、今回発掘調査した谷あいでも複数の梵鐘が鑄造された可能性が大きい。文献からもはっきりした場所の特定はなされていないが、延宝6年（1678）鳥取藩の令以後面影山中でかなりの梵鐘が鑄造されたことが明らかにされている。

今回発掘調査で出土した梵鐘の鑄型は、冒頭に記した供出された鐘を鑄造したときのものである

かは、残された文献からは明らかではないが、記録に見える重量100貫（約375kg）の鐘の大きさと、今回出土した大きな中子から想定できる鐘の大きさはほぼ同じになりそうである。

鋳型とともに出土した染付の時期などもほぼその時期であろう。光明寺の梵鐘である蓋然性は高いものと考えられる。

3. 里仁遺跡

里仁遺跡は、今回の発掘調査の契機となった自動車学校建設用地計画の事前踏査によって確認された遺跡である。計画地全域に11ヵ所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。ほとんどのトレンチで土器等の遺物が出土したが、第8トレンチ以外は少量かつ細片の出土にとどまった。しかし、第8トレンチの包含層も弥生時代から中世の陶磁器まで混在し、二次的な包含層である可能性が高い。第9トレンチからは、耕作土下のローム層から柱穴の検出を見たが、調査面積が狭小であることもあり建物の規模等を確認するまでにいたらなかった。この遺構に伴う遺物包含層は、水田造成時に既に削平されたものと考えられる。柱穴内からは弥生土器が出土したものもあるが、概して遺物の出土が少ない。このため柱穴の時期は、弥生時代から中世の幅の中で考えざるを得ない。

今回の調査から、里仁遺跡は西側丘陵の裾部、すなわち現在の集落に重なるように分布しているものと考えられる。また、調査地の東側は野坂川の旧河道及び氾濫原であったようであり、水田の地割りからも推定することができる。

主要参考文献

西村繁昌「大杭村と蜘蛛山村の傍示論争のこと」『面影山郷土史』第11号 1981年

西村繁昌「面影山と釣鐘鋳造のこと」『面影山郷土史』第13号 1981年

坪井良平『日本の梵鐘』 1970年

有福友好『梵鐘』 1981年

倉吉市教育委員会『倉吉の鋳物師』1980年

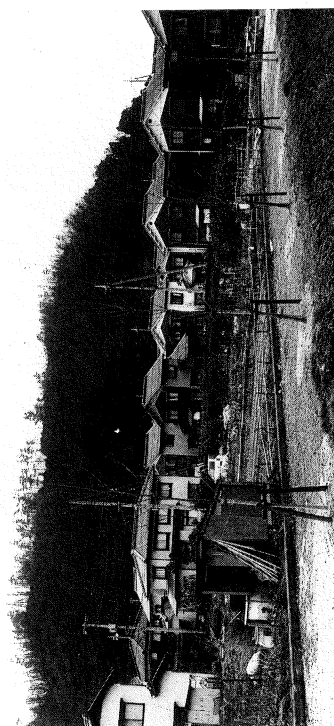
倉吉市教育委員会『倉吉の鋳物師（その式）』1981年



T 1 完掘



T 3 完掘

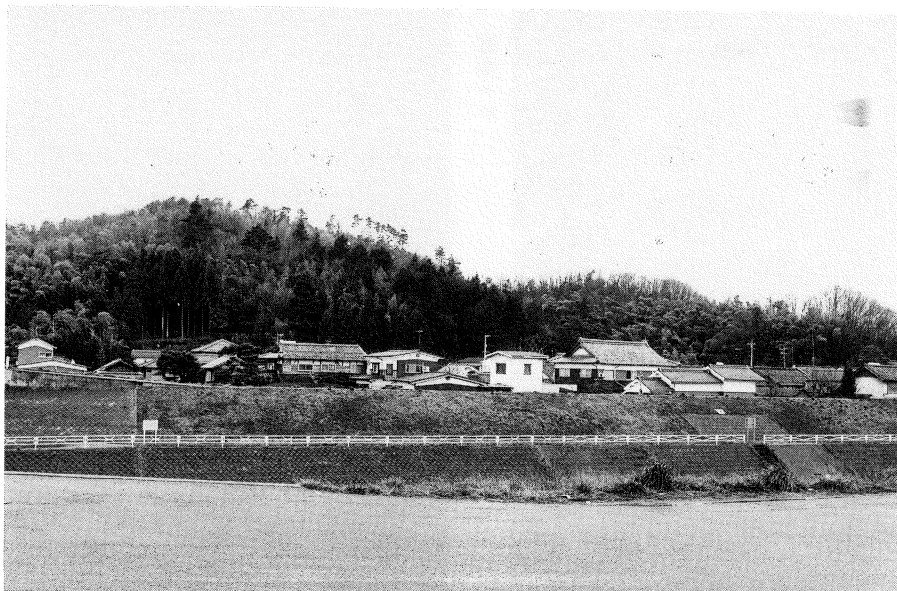


調査地遠景 (北から)

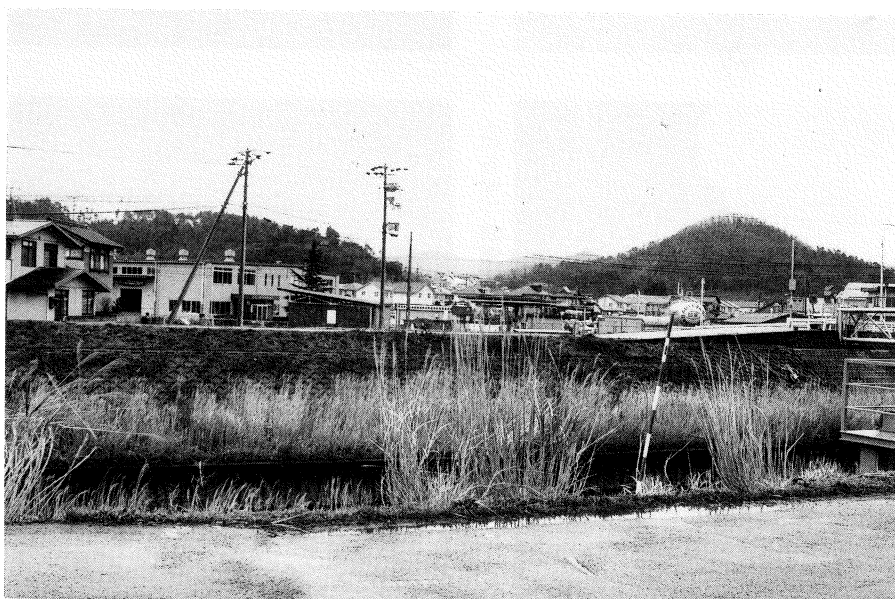


T 2 断面
齋山城跡

図版 2

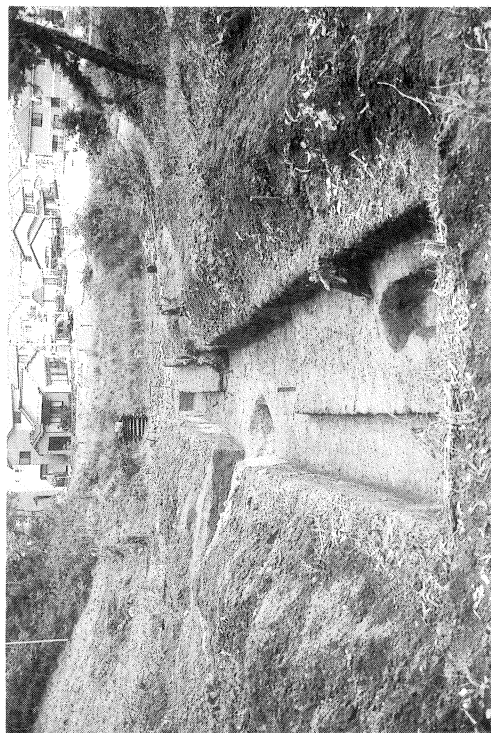


調査地遠景（北から）



調査地遠景（南西から）

大杓鐘鑄谷遺跡



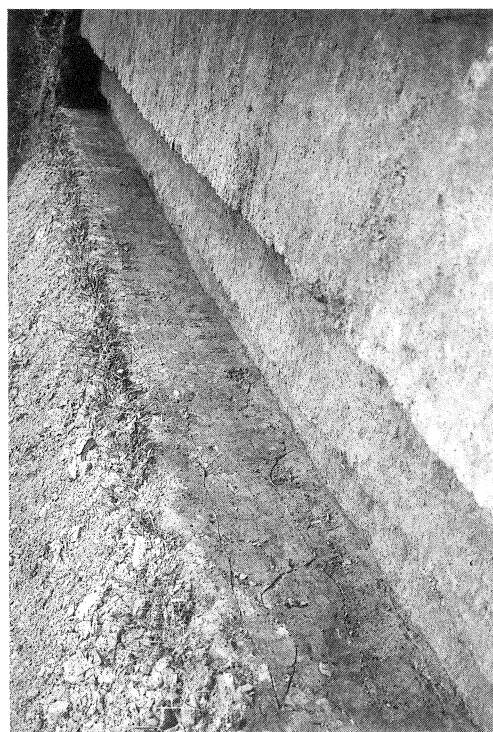
T A 完掘



調査役



調査前



T B 断面
大代鐘鑄谷遺跡

図版 4



S K - 01 遠景



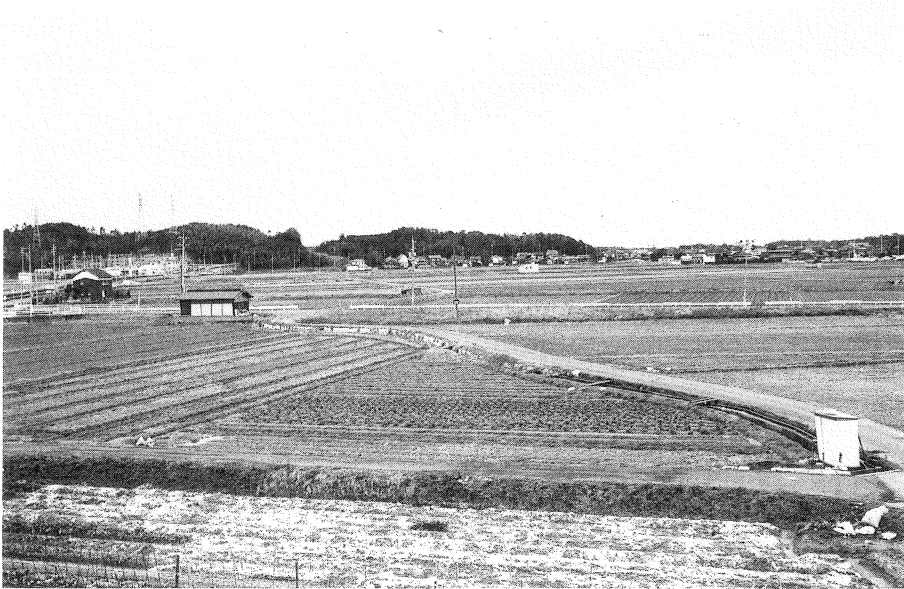
S K - 01



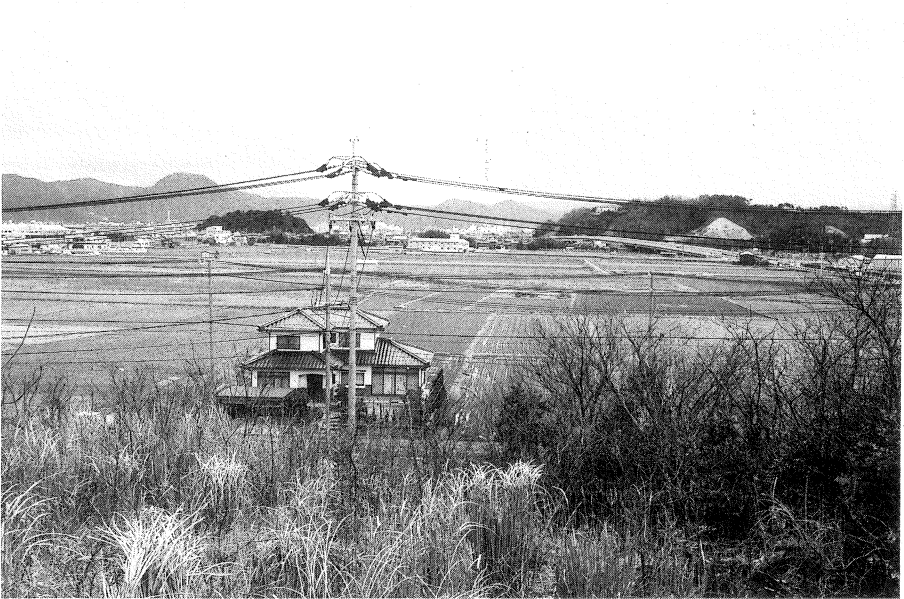
S K - 01 内出土遺物
大杓鑄鑄谷遺跡



S K - 01 内出土遺物



調査地遠景（東から）



調査地遠景（西から）

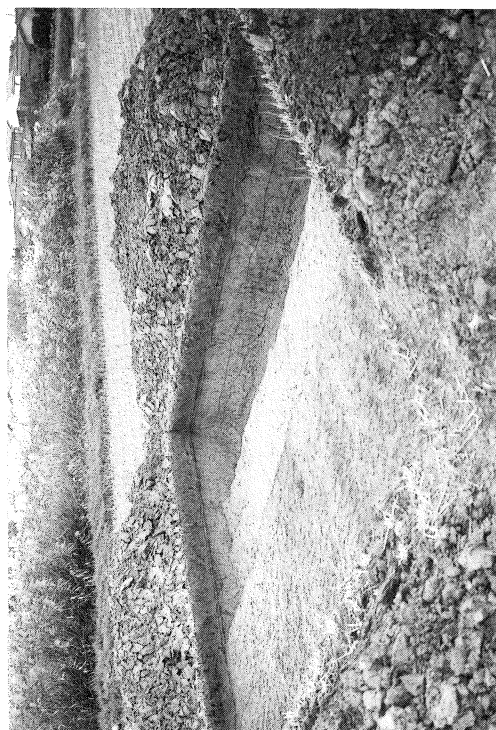
里仁遺跡



T 2 完掘



T 3 完掘



T 1 完掘



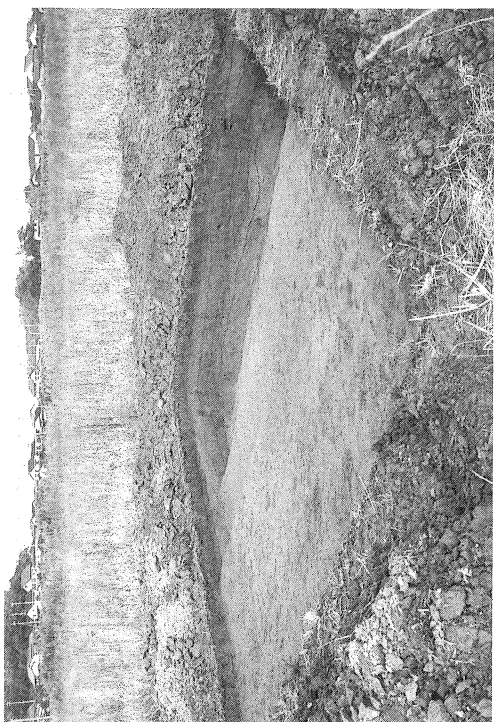
T 3 調査前



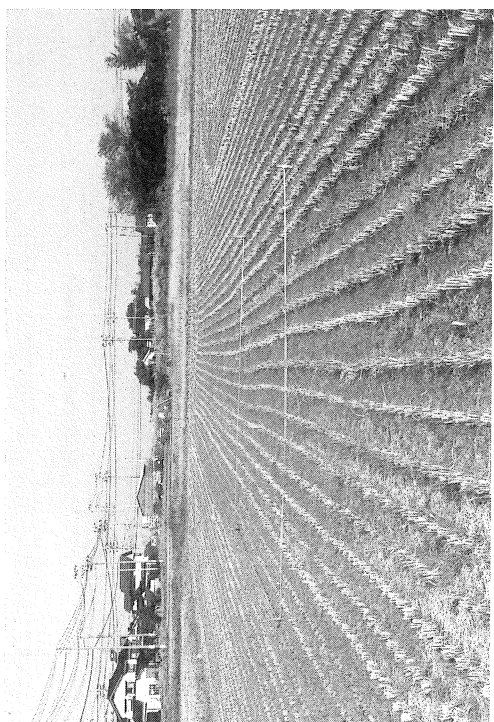
T 7 完掘



T 8 完掘



T 4 完掘



T 8 調査前

里仁遺跡

图版 8



T 9 断面



T 11 完掘

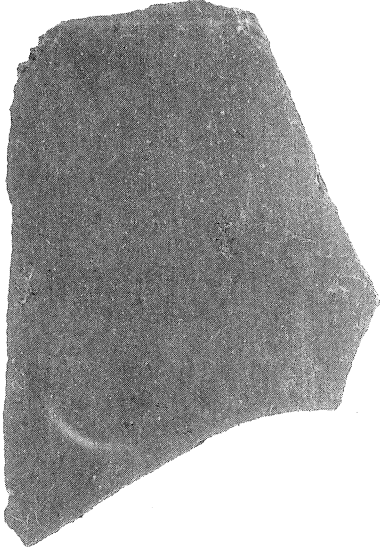


T 9 完掘



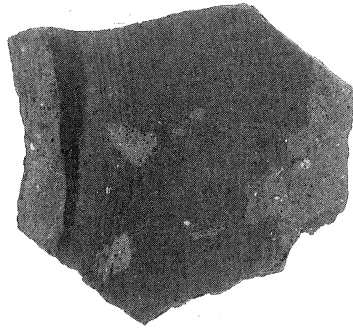
T 10 断面

里仁遺跡



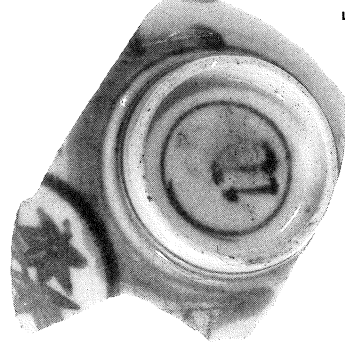
1

爵山城跡 T 3

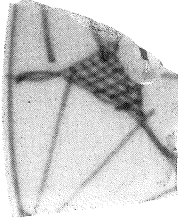


3

大杙鐘鑄谷遺跡 S K-01



4



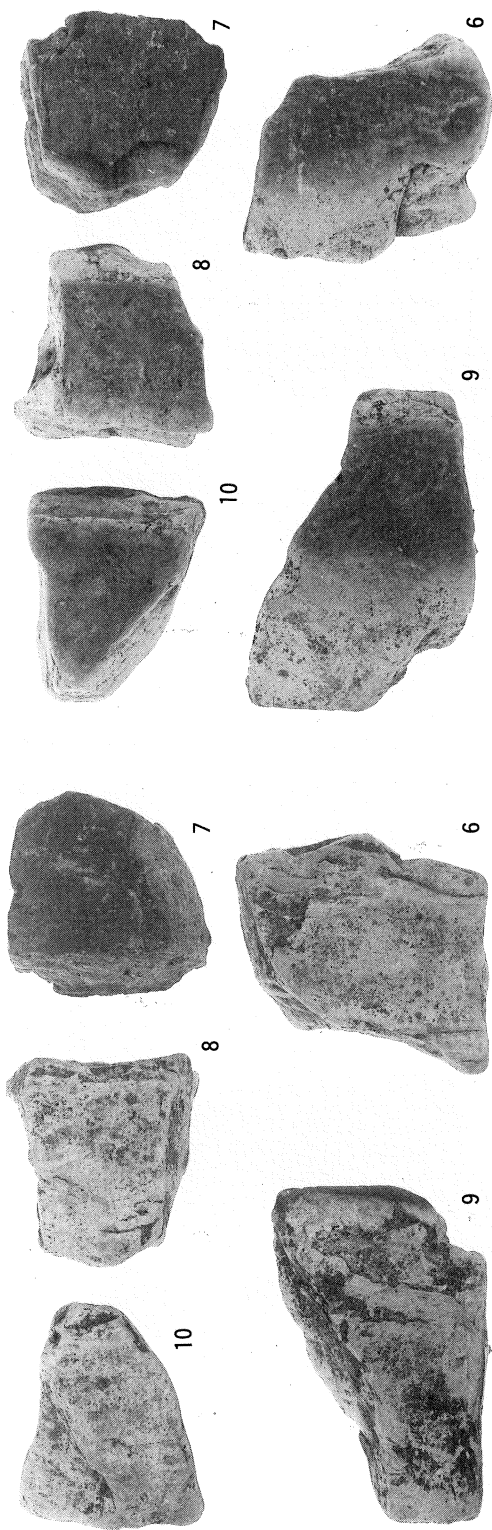
5

図版 9

大杙鐘鑄谷遺跡 S K-01

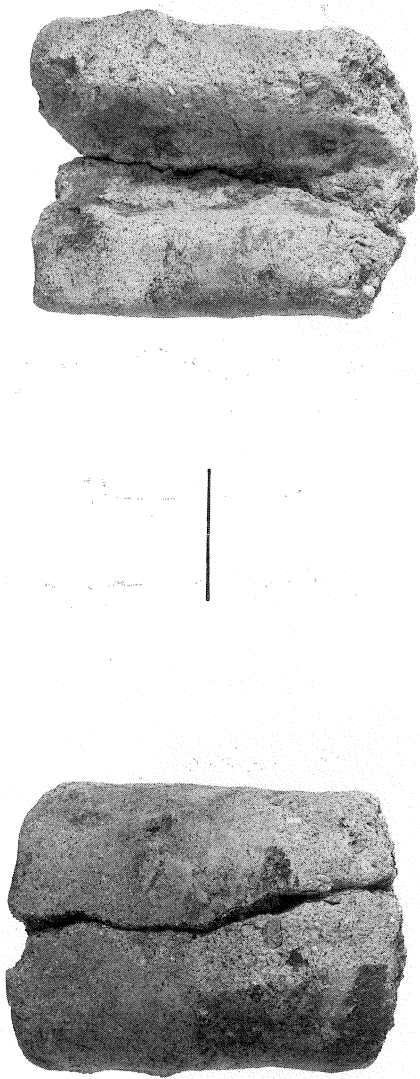
出土遺物

図版10



大杙鐘鑄谷遺跡SK-01 (凹面)

同 (凸面)



11

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



12

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



13

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



15

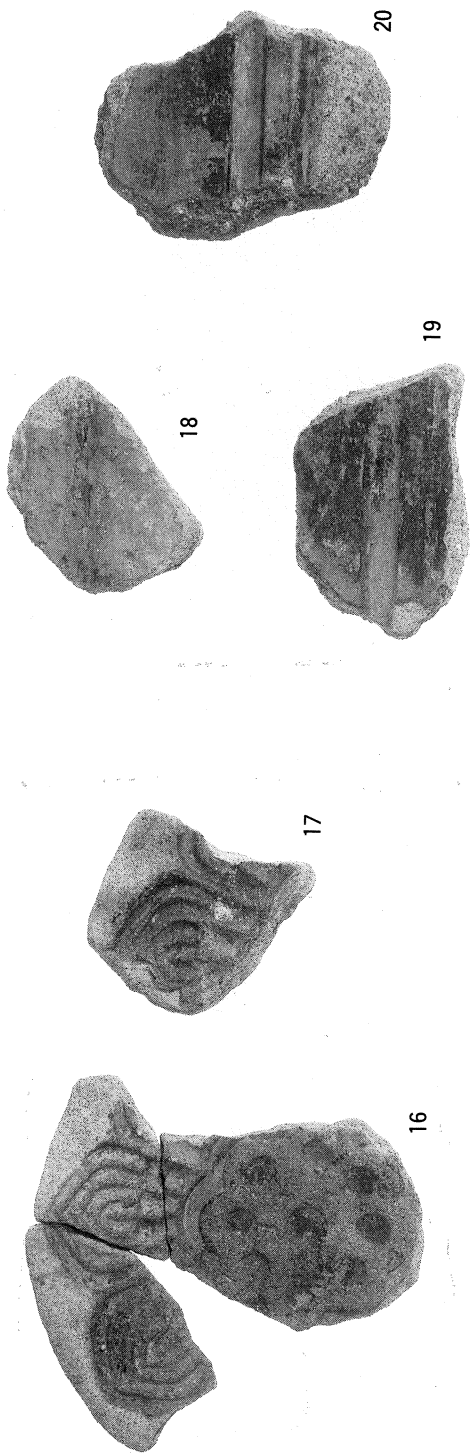
大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



出土遺物



14
大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



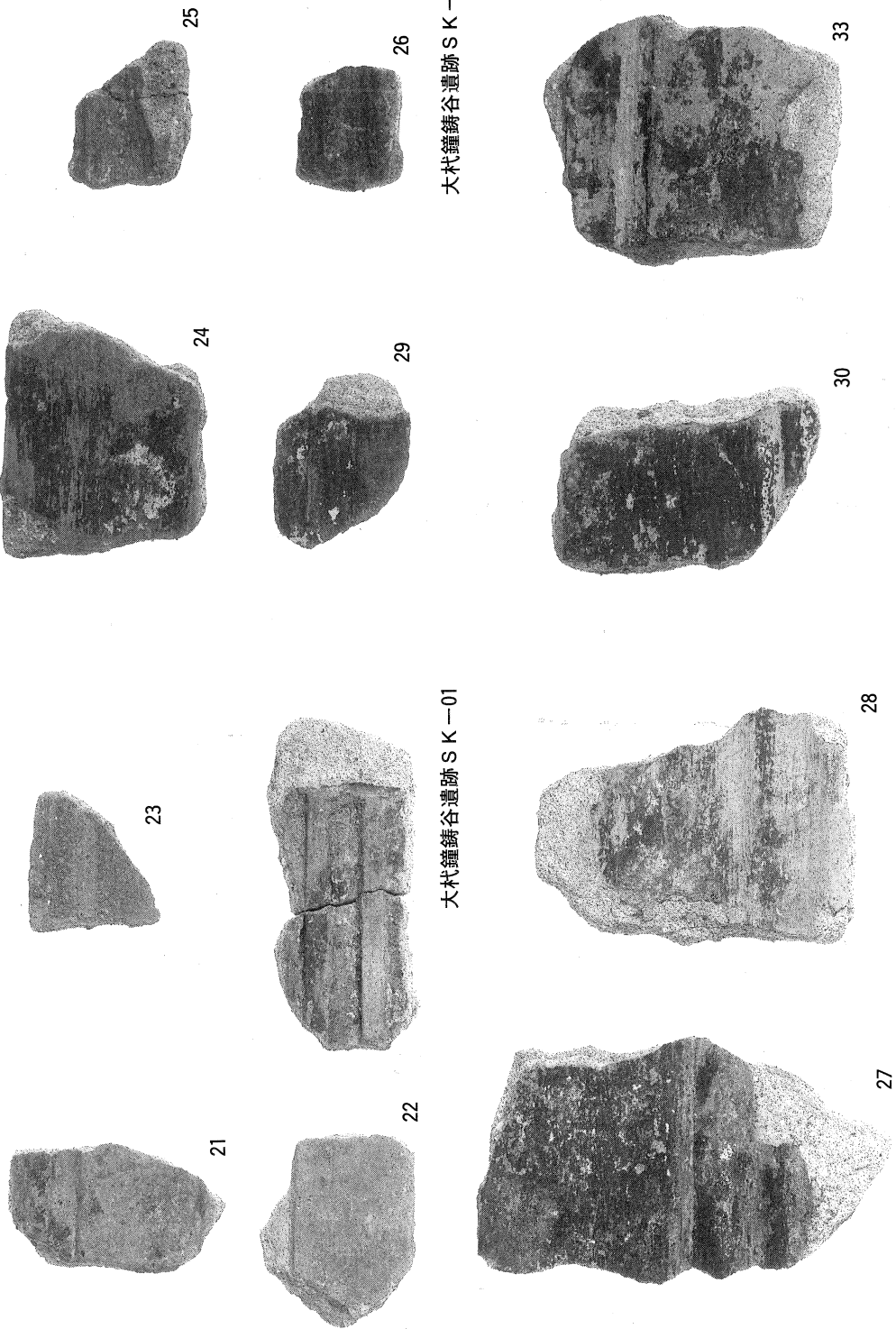
大杙鐘鑄谷遺跡SK-01

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01

大杖鐘鑄谷遺跡SK-01

出土遺物

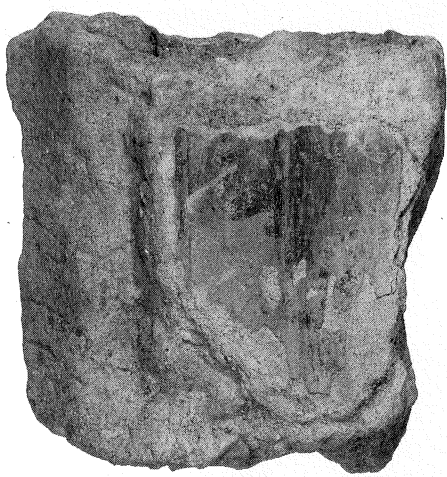
大杖鐘鑄谷遺跡SK-01



大杖鐘鑄谷遺跡SK-01

大杖鐘鑄谷遺跡SK-01

大杖鐘鑄谷遺跡SK-01



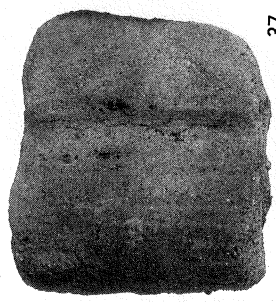
35

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



36

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



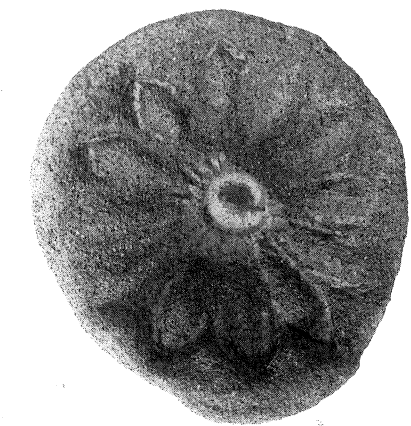
37



38

大杙鐘鑄谷遺跡SK-01

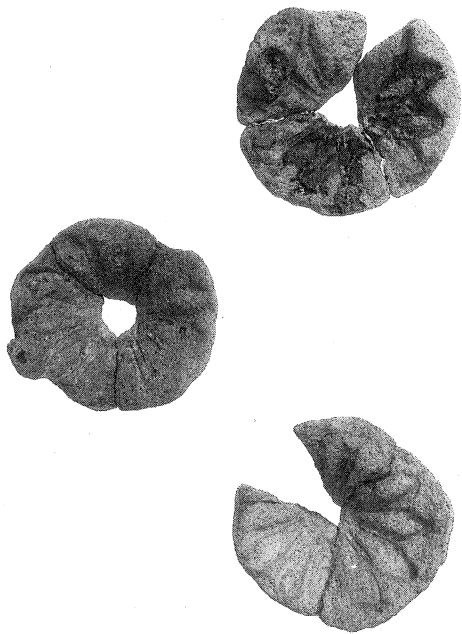
出土遺物



大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



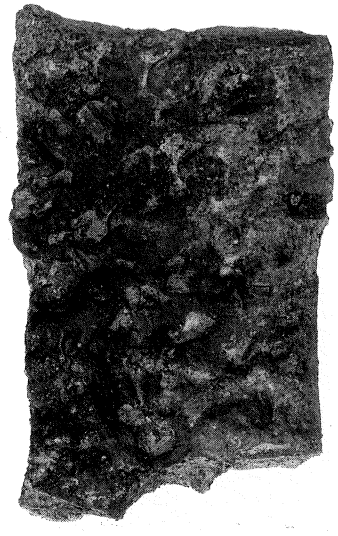
大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



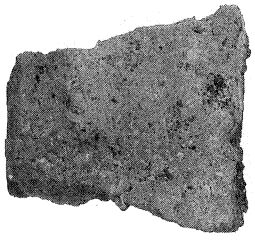
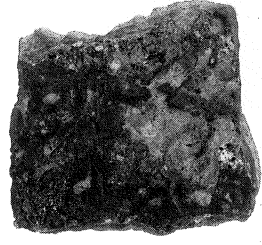
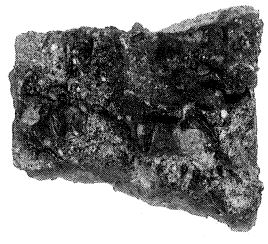
大杙鐘鑄谷遺跡SK-01



出土遺物



大杣鐘鑄谷遺跡SK-01



大杣鐘鑄谷遺跡SK-01

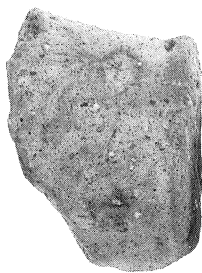
出土遺物

同(内面)

里仁遺跡 T 8

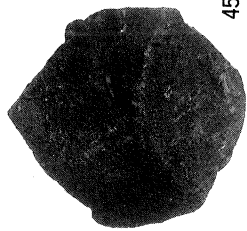


47



里仁遺跡 T 6

45



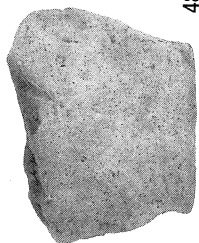
出土遺物

里仁遺跡 T 4

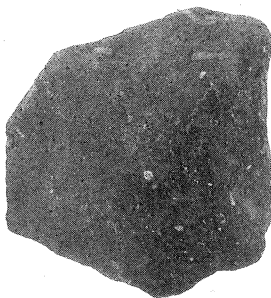
43



48



49

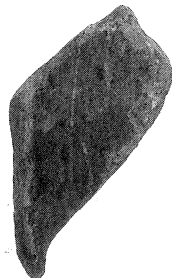
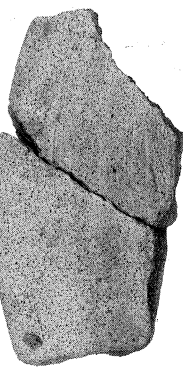
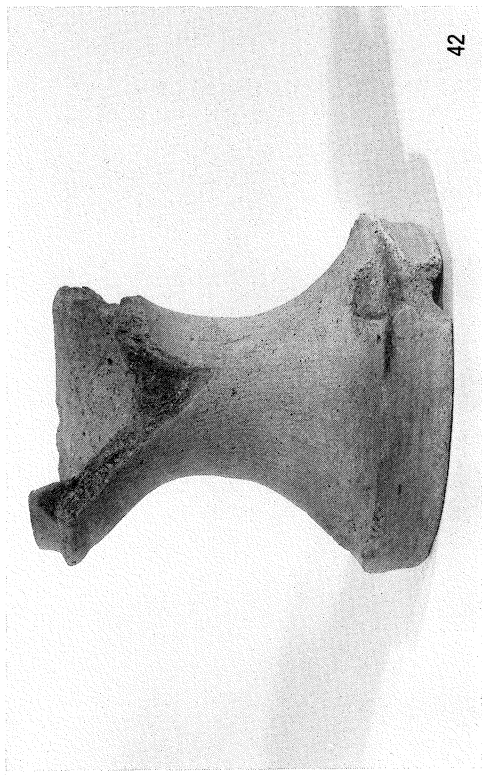


44

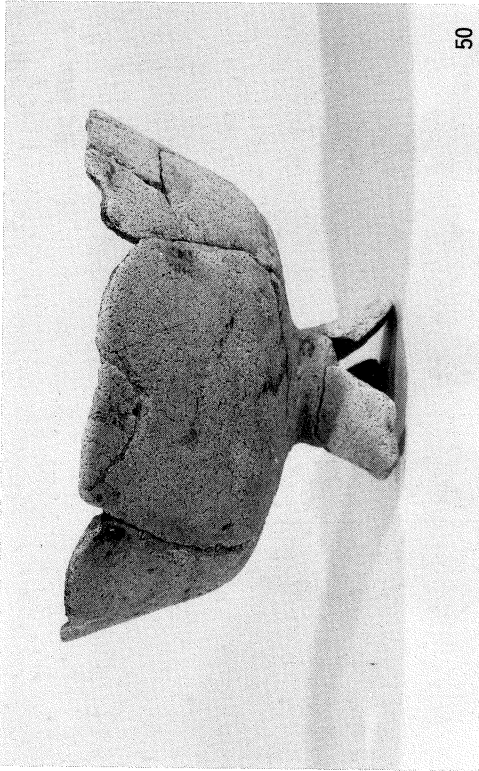


里仁遺跡 T 1

42

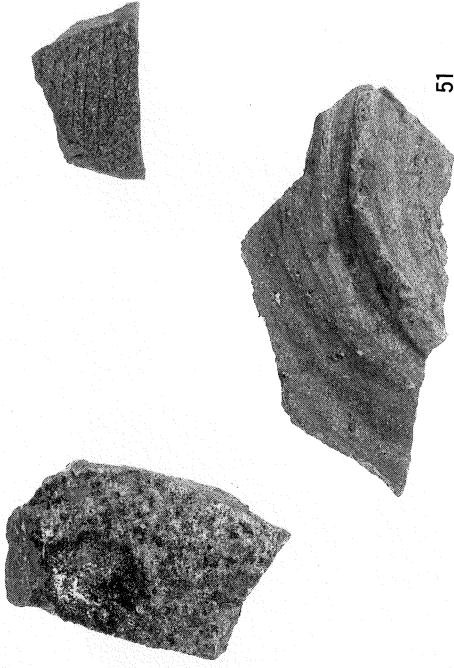


图版18



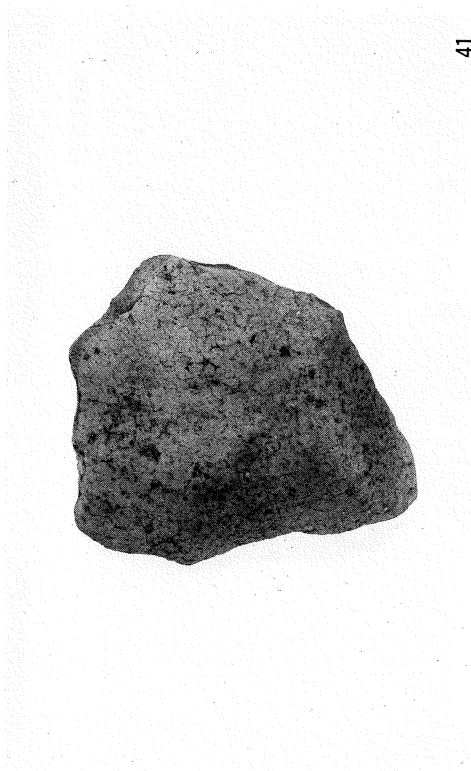
50

里仁遺跡 T 8



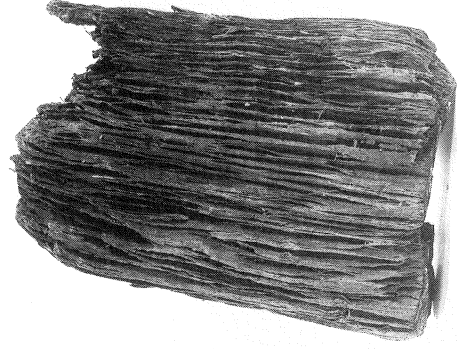
51

里仁遺跡 T 8



41

里仁遺跡 T 9 · P-02



里仁遺跡 T 9 · P-01

平成4年度
鳥取市内遺跡
発掘調査概要報告書

平成5年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
